

7. 出土遺物について

柱上面出土遺物（第87～88図・写真145～146・表21）

柱上面から出土した遺物で、掲載した遺物は、鉄製品11点のみである。

1は、展開長8.2cm、最大幅7cm、厚さ0.7cmの帯状鉄製品である。両端部が欠損しているが、体部が大きく屈曲することから鎌であると考えられる。

2は、長さ14.8cm、幅7.3cm、厚さ1.2cmの帯状鉄製品である。両端部が欠損しているため不明であるが、他の帯状鉄製品の特徴から鎌の背部の一部であると考えられる。

3は、展開長19cm、最大幅8.2cm、厚さ0.8cmの帯状鉄器である。先端部の屈曲から鎌であると考えられる。鎌の背部内側に鉄釘が鋲着している。

4は、展開長20.7cm、最大幅7.6cm、厚さ1.5cmの帯状鉄製品である。下端部は欠損しているが、先端部は残存している。背部から爪部へは、90°に曲げられ成形されている。先端部は、実際に使用される際に折れ曲がったのであろうか。180°折り返されている。爪部が11.5cmと打ち

込みの深い鎌であったと考えられる。

5は、長さ36cm、断面方形の鉄釘である。先端部を若干欠損しているが、ほぼ完形のものである。先端部3cmには全体的に、また中央部の一部にも赤色顔料が確認できる。

6は、長さ12cm以上の鉄釘である。頭部は圧延により台形となる

7は、頭部・先端部を欠いているが、断面方形の鉄釘であると考えられる。

8は、17cm以上の釘である。頭部と胴部がほぼ同じ幅で単純に終わる。

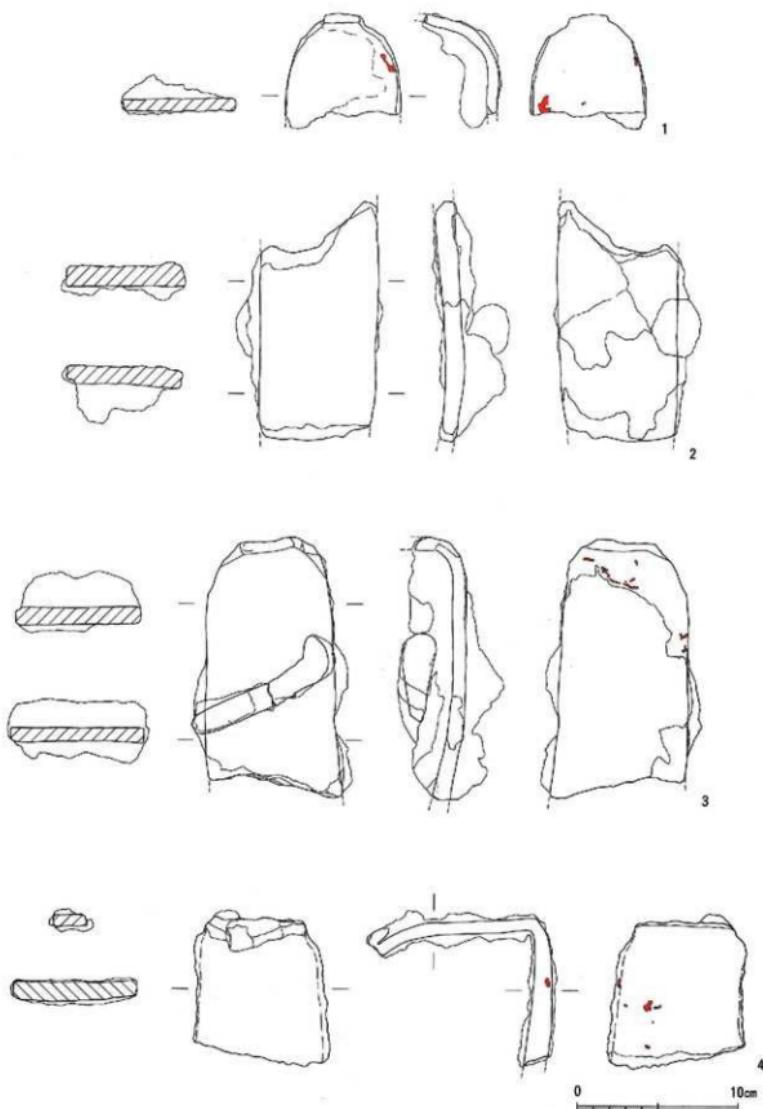
9は、展開長12cmである。先端部・下端部は欠損しているが、体部が屈曲することから鎌であると考えられる。

10は、両端が屈曲することから鎌であると考えられる。展開長23cmである。爪部が、3.5cm、背部が19.5cmである。先端部が欠損しているが、ほぼ完形である。

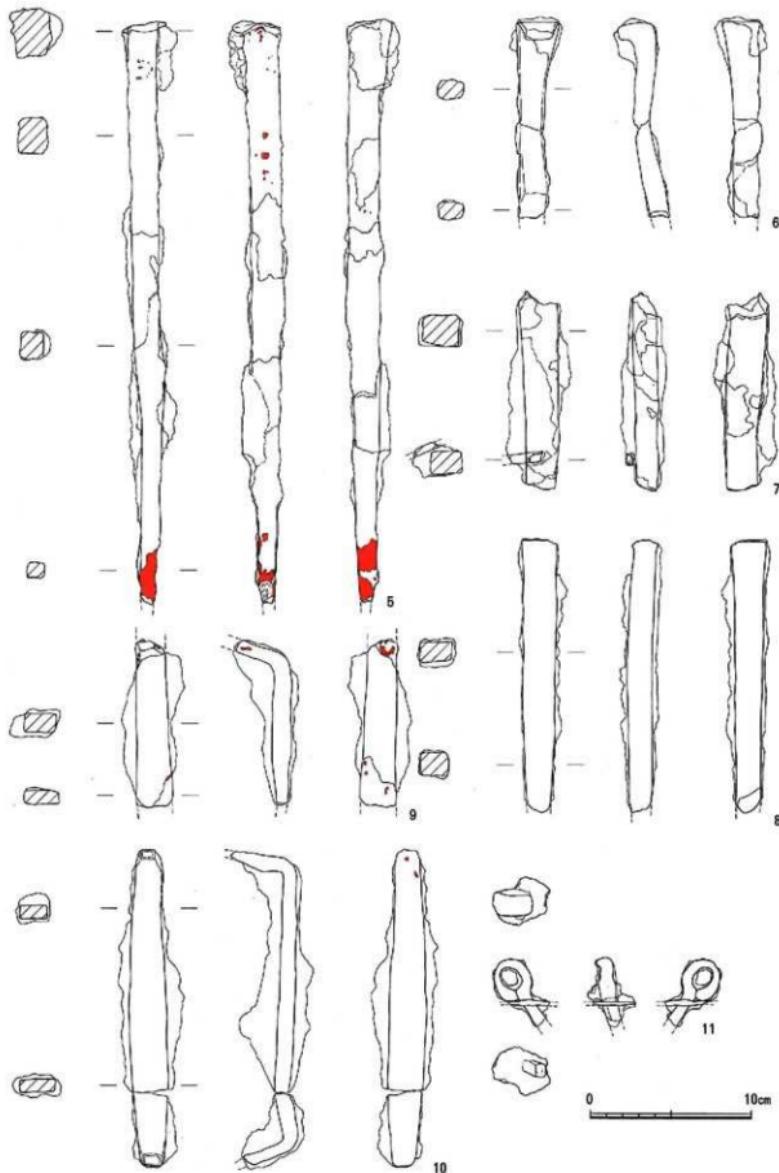
11は、環状の金具である。端部を鍛打により折り曲げ環状にし、厚さ3mmの鉄板に通している。使用方法にいては、不明瞭であるが飾り金具として使用されたものであろうか。

表21 八足門前調査区 心御柱上面 出土遺物(鉄製品)観察表(番号は第87・88図と対応)

番号	部位	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	測定率(%)	備考
1	心御柱上面	鎌	背部長4.2 爪部長4.0(頭部欠)	背部幅7.0	0.7	116.63	30	表面全面に赤色顔料付着
2	心御柱上面	帯状金具	14.8	7.3	1.2	565.4	30	薄い板状
3	心御柱上面	鎌	背部長16.0 爪部長5.0(頭部欠)	背部幅8.2	0.8	776.36	50	表面全面に赤色顔料付着
4	心御柱上面	鎌	背部長7.2 爪部長(頭部欠)11.5	背部幅7.6	1.5	812.78	30	背面に赤色顔料付着、爪部外側に折れる
5	心御柱上面	釘	36.1	頭部幅1.8×2.7	1.8×2.2	145.99	100	打面：長方形／頭部：頭部と同じ様に単純に終わる／先端部にねじり／光面及び側面に赤色顔料付着
6	心御柱上面	釘	12	頭部幅2.2×2.3	1.6×1.8	89.02	50	打面：方形／頭部：端部折り曲げ、頭部との境にくびれなし
7	心御柱上面	釘	12.5	頭部欠	1.9×2.2	167.36	30	頭部、先端部を欠く
8	心御柱上面	釘	17	頭部幅2.1×1.3	頭部幅と同じ	248.55	80	打面：長方形／頭部：頭部と同じ様に単純に終わる
9	心御柱上面	鎌	背部長9.0 爪部長5.0(頭部欠)	背部幅2.0	1	84.83	50	表面全面に赤色顔料付着
10	心御柱上面	鎌	背部長19.5 爪部長5.5(頭部欠)	背部幅2.3	1	225.85	100	背面に赤色顔料付着
11	心御柱上面	環状金具	4.5	環部最大幅2.4	0.6×0.7	19.2	50	頭部を曲げて環状に作る



第87図 八足門前調査区 心御柱上面出土遺物実測図(1) (S=1/3)



第88図 八足門前調査区 心御柱上面出土遺物実測図(2) (S=1/3)

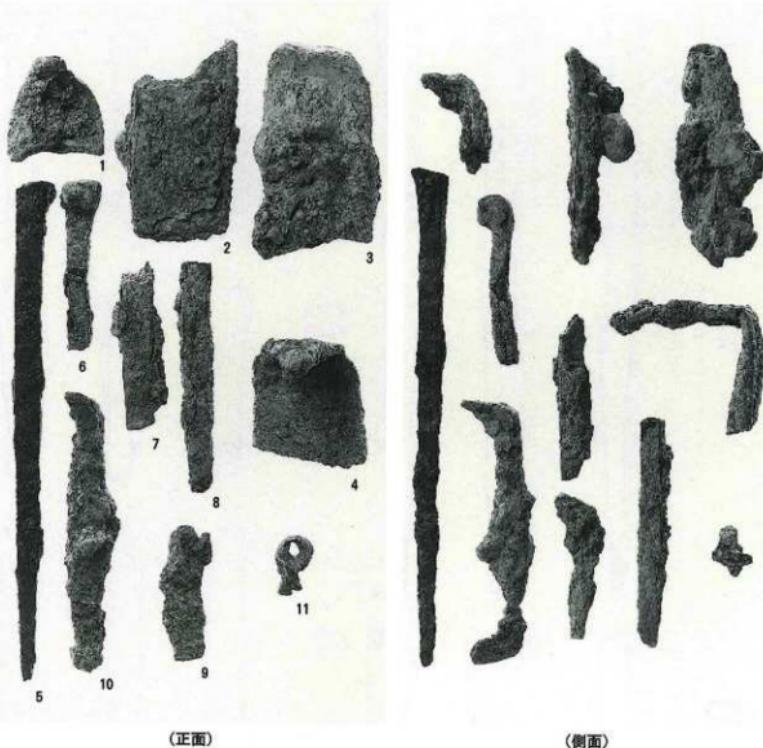


写真145 八足門前調査区 心御柱上面 鉄製品（番号は第87～88図と対応）



写真146 八足門前調査区 心御柱上面 鉄製品赤色顔料付着部分（第88図－5）

柱穴内出土遺物（第89図・写真147～148・表22～23）

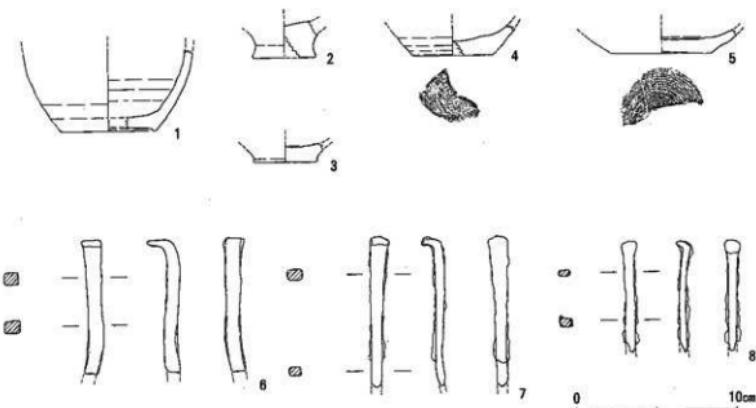
1は、須恵器の壺の底部であろうか。外面は、ヘラ状工具による回転ナデが施されている。

2～5は、土師質土器である。2は、柱状高台付壺の破片である。3は底径4cm、4は底径

5cm、5は底径6cmの皿である。

6～8は、小型の鉄釘のみであり、大型の鉄製品は出土していない。出土位置は、柱穴の底部である。

3点とも、先端部が欠損しているが、頭部は圧延によりやや折り曲げられた釘である。



第89図 八足門前調査区 心御柱掘り方内出土遺物実測図 (S=1/3)

表22 八足門前調査区 心御柱柱穴内 出土遺物（土器）観察表（番号は第89図と対応）

番号	層位	種類	器種	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	残存率	色調	胎土	調査/形態/文様	備考
1	心御柱柱穴	須恵器	壺	—	—	5	全体の30	青灰色	表面：一箇所 以下回転ナデによる強烈な 擦痕を少しご 含む	底面：柱状高台工具による強い回 転ナデによる凹凸状の跡を多くも つける 外側：ヘラ状工具による回転ナデ	—
2	心御柱柱穴	土師質土器	柱状高台付 壺	—	—	—	全体の30	にぼい褐色	青	底面：回転角切り 内外面：回転ナデ	—
3	心御柱柱穴	土師質土器	皿	—	—	4	底部の50	灰青褐色	やや粗	底面：回転角切り 内外面：回転ナデ	—
4	心御柱柱穴	土師質土器	皿	—	—	5	全体の30	成緑色	青	底面：回転角切り 内外面：回転ナデ？	表面が美しい
5	心御柱柱穴	土師質土器	皿	—	—	6.2	全体の30	にぼい褐色	やや粗	底面：回転角切り 内外面：回転ナデ	—

表23 八足門前調査区 心御柱柱穴内 出土遺物（鉄製品）観察表（番号は第89図と対応）

番号	層位	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存率(%)	備考
6	心御柱柱穴	釘	8.2	頭部幅 1.0×1.5	0.8×0.7	27.08	80	打削：長方形／頭部：端部圧延、折り曲げ、頭部 との境にくびれなし
7	心御柱柱穴	釘	9.3	頭部幅 1.0×1.1	0.9×0.4	9.44	80	打削：長方形／頭部：端部圧延、折り曲げ、頭部 との境にくびれなし
8	心御柱柱穴	釘	6.9	頭部幅 0.8×0.9	0.7×0.5	9.43	80	打削：長方形／頭部：端部圧延、折り曲げ、頭部 との境にわすかなくびれあり

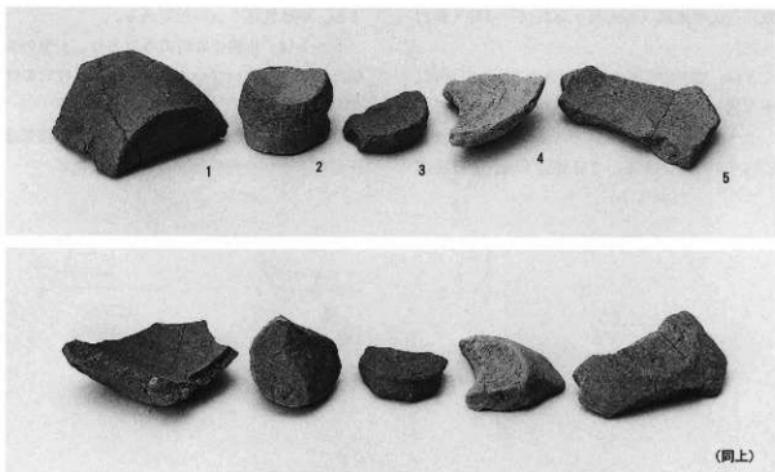


写真147 八足門前調査区 心御柱柱穴内 土器 (番号は第89図と対応)

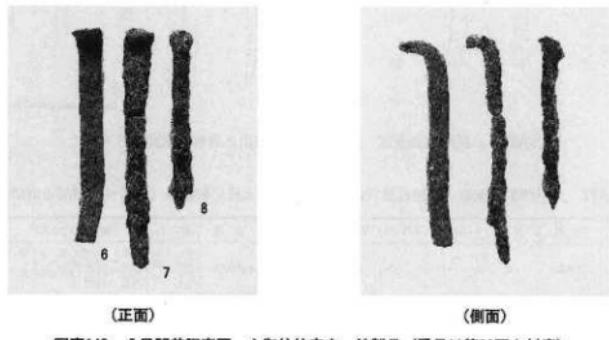


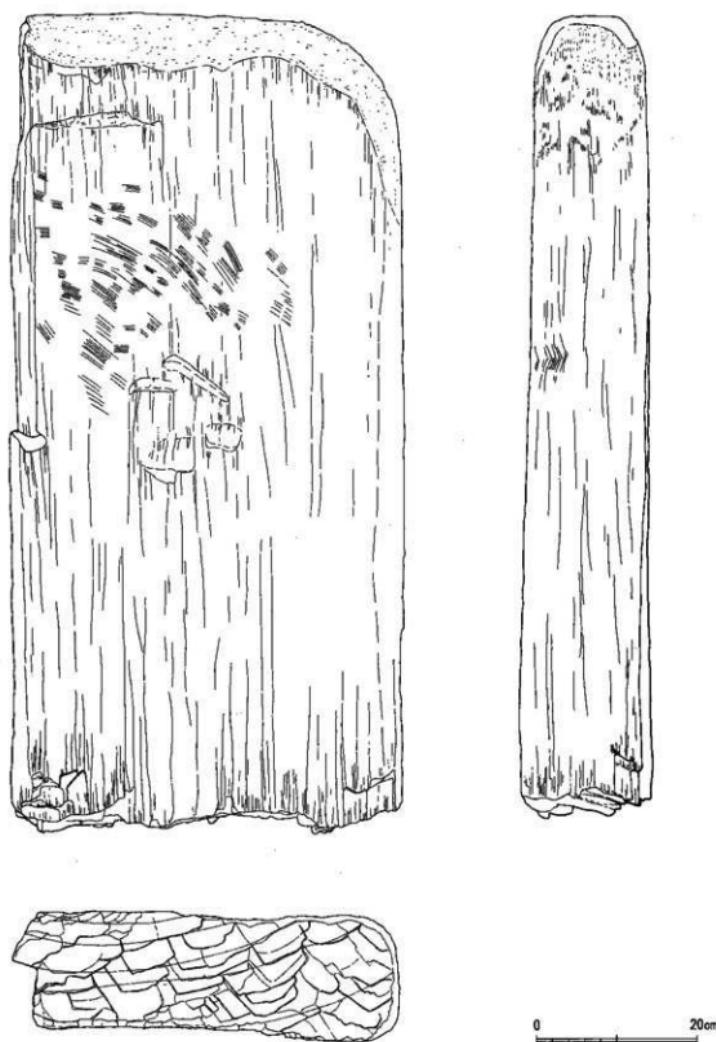
写真148 八足門前調査区 心御柱柱穴内 鉄製品 (番号は第89図と対応)

出土板材 (第90図・写真149～151)

第90図に掲げたのは、南西柱材直下から出土した板材である。樹種は杉で、年輪は280層である。長さ103cm、幅47cm、厚さ15cmで、大木の辺材を木取りした板目材である。板材の側面をみると一方が荒く切断されているのに対して、もう一方はかなり丁寧に仕上げられており、本来の使用用途があったと思われる。本来の使用目的は、不明であるが、転用された板材である

と推測される。

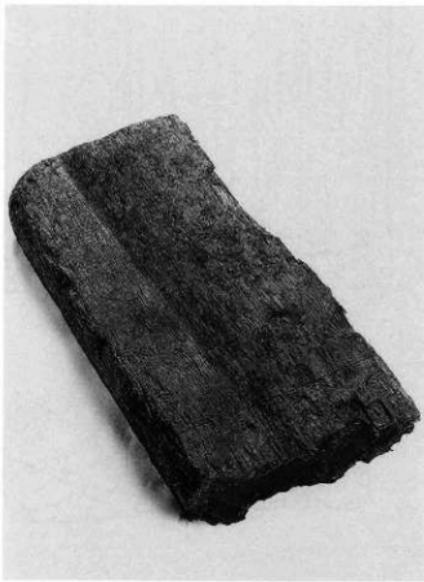
使用目的について南西柱材直下のみ出土していること、また南西柱材よりも板材のほうが小さいことから、礎盤となり得ない。可能性としては、柱立て作業時に、柱材と地面の摩擦軽減や、柱位置の微調整のために用いられたと考えられる。なお、この板材は年輪年代測定用試料として用いられている。測定結果については、後述する(第11章参照)。



第90図 八足門前調査区 心御柱直下出土板材実測図 (S=1/6)



(表面)



(裏面)

写真149 八足門前調査区 心御柱直下板材



写真150 八足門前調査区 心御柱直下板材（板材加工痕）

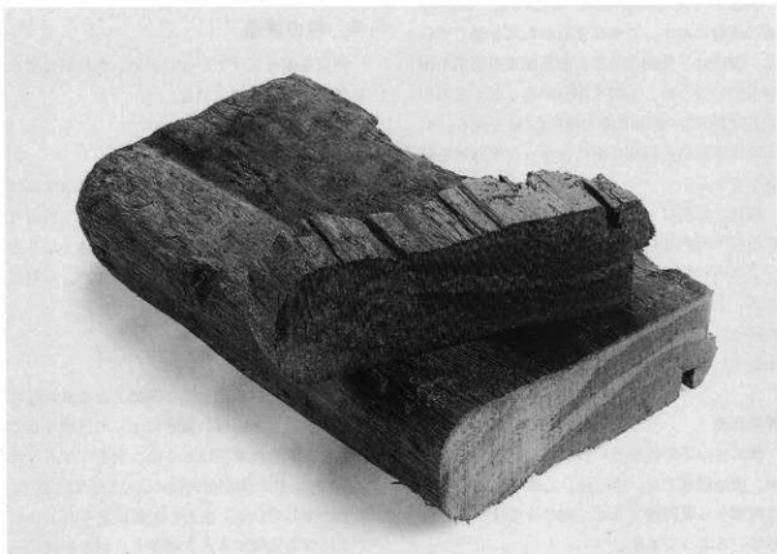


写真151 八足門前調査区 心御柱直下板材（年輪年代測定分析部分）

第5節 南東側柱の調査

1. 位置

宇豆柱と心々距離で6.7m東、直線距離で7m東北東側に位置している。柱の上層には、慶長期の本殿遺構が存在していた。場所を確定するため、慶長本殿2号柱跡の一部分を掘り下げる必要が生じた。その結果、なるべく慶長本殿遺構を保存し、最低限本殿遺構調査に必要な部分の2号柱跡南半分について掘り下げを行ない、南東側柱の位置を確認した。

2. 柱穴の検出面

柱穴の検出面は、宇豆柱、心御柱と同じく標高7.4m前後である。上層の慶長度遺構面から約60cm掘り下がった時点で柱の上面を検出した。

3. 柱穴の構造

規模

検出した柱穴の規模は、南北6.5m、東西3.5mで南側にむかってすぼまるかたちを呈している。規模は、北側部分が、慶長度本殿遺構を保存しているため、不明な部分があるが平面形が南北間約7.0、東西間最大幅約3.5mを測る。平面形は宇豆柱と同様に南にとがった倒卵形を想定している。

柱は、北側に1本（北柱材）南側に2本（南東柱材・南西柱材）の3本を確認した。

3本の柱材はそれぞれ接していると考えられるが、上面部分は腐食により目減りしているため接していない。柱材それぞれの最大径は、検出面よりもさらに下方であることが想定される。

礎の充填

礎についての重量等については、不明であるが、表面観察では、宇豆柱、心御柱と同様に礎は角礎から亜円礎である。礎のみで柱穴を充填しているようである。

柱上面

柱材の直上には、青灰色の粘質土が堆積していた。これは、柱上面部分が、常時水位面よりも上にあったため、腐食し、そのかわりにきめの細かい粘質土が置換したものと考えられる。その上面には、厚さ20cm前後の炭化物を多量に含む焼土層が確認された。焼土は、柱の上面のみに限られる。焼土層から土器、鉄製品が出土している。

赤色顔料

柱上面から出土した鉄釘には、赤色顔料の付着した鉄釘が出土しているほかは、赤色顔料の出土はない。

柱の立ち方

柱穴を掘り下げていないこと、また一部が矢板に切られていることから柱の傾きなどは不明と言わざるを得ない。柱、周辺の礎を観察する限りでは、転倒したとする証拠はない。

4. 柱の構造

柱穴を掘り下げていないため、各柱材に関する情報はかなり限られる。

北柱材

樹種は杉である。上面で確認できる最大直径は、84cmである。上面は、腐食によって目減りしており、本来の最大径はさらに大きくなると考えられる。完全露出していないため、年輪なども不明である。

南東柱材

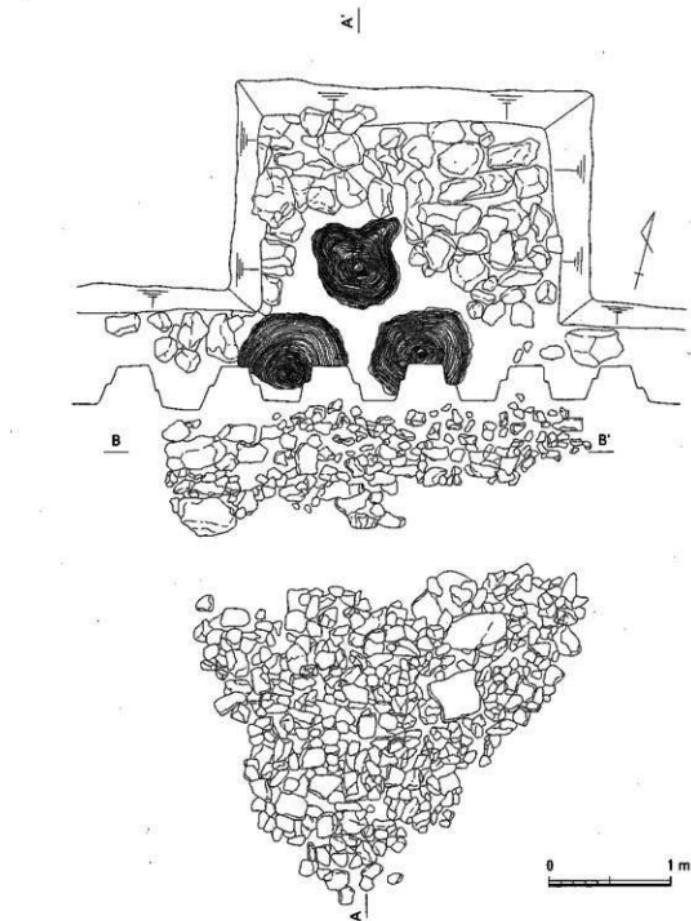
樹種は杉である。上面で確認できる最大径は88cmである。上面は、腐食によって目減りしており、本来の最大径はさらに大きくなると考えられる。柱の南側は矢板により切られており、亀裂が生じている。また、矢板に切られていない北柱材と比較すると上端が北柱材より約15cm低い。矢板の打ち込みによって柱自体が下がっ

たのであろうか。完全露出していないため、年輪なども不明である。

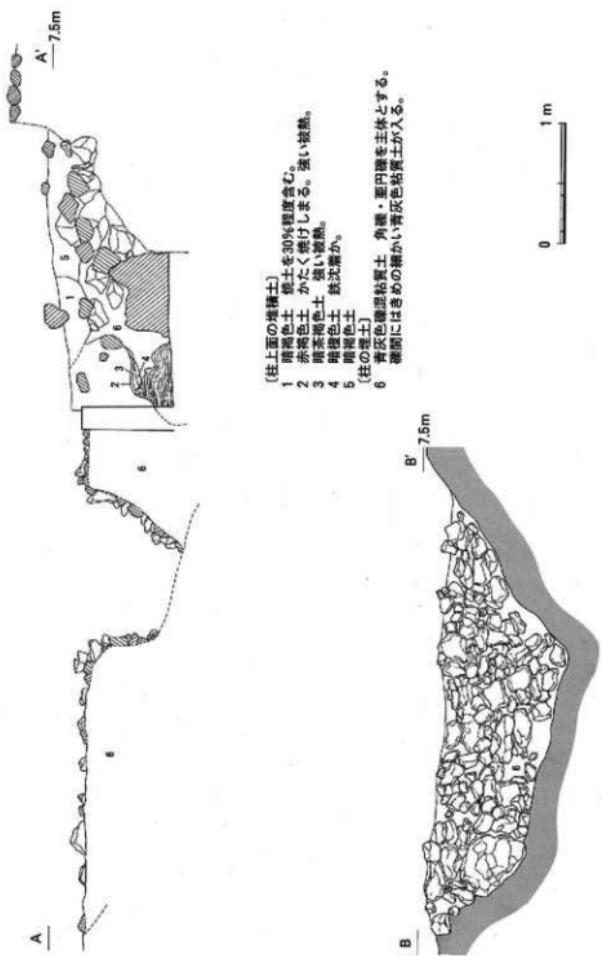
南西柱材

樹種は杉である。上面で確認できる最大径は90cmである。上面は、腐食によって目減りして

おり、本来の最大径はさらに、大きくなると考えられる。矢板に切られていない北柱材と比較すると上端が北柱材より約15cm低い。南東柱材と同様に矢板の打ち込みによって下がったのであろうか。完全露出していないため、年輪なども不明である。



第91図 八足門前調査区 南東側柱出土状況平面図 (S=1/40)



第92図 八足門前調査区 南東側柱土層図 ($S = 1/40$)



写真152 八足門前調査区 南東側柱出土前の
状況（南東から）



写真153 八足門前調査区 南東側柱出土前の
状況（北東から）



写真154 八足門前調査区 南東側柱出土状況
(北から)



写真155 八足門前調査区 南東側柱出土状況
(北東から)

5. 出土遺物について

柱上面出土遺物（第93図・写真156～159・表24～25）

1～12は土師質土器である。そのうち、1～8は皿である。1～3は、底部周辺を強くナデ取り、くびれさせるものである。4～8は、口縁が丸みを帯びるタイプである。

9～12は、柱状高台付灰である。9は、焼成時に底部が変形したものである。10、11は磨耗が激しい。12は、底部に回転糸切り痕がみられる。

13～23は鉄製品である。

13は、頭部を圧延した釘、もしくは鍵であると考えられる。14は、展開長7.3cmで、体部が屈曲していることから、釘もしくは、鍵の一部と考えられる。15は、端部が屈曲しており、体部にいくにしたがって幅が広くなる。先端部が欠損しているが、釘もしくは鍵であると考えられる。

16は、帶状の鉄製品である。展開長28.4cmである。両端部が欠損しているが、体部上端が110°折り曲げられていることから、鍵であると考えられる。最大幅7cm、厚さ1cmである。

鏡には、2点の釘が銹着している。

17は、帶状の鉄製品である。展開長16.3cmである。両端部が欠損しているが、体部上端が90°折り曲げられていることから、鍵であると考えられる。最大幅6.8cmである。

18は、帶状の鉄製品である。両端部が欠損しているが、長さ19.6cm、幅5cm、厚さ0.7cmである。他の帶状鉄製品からすれば、鍵の背部である可能性がある。16・17は最大幅が7cmであるのに対して幅5cmと狭い。

19～23は、鉄釘であると考えられる。

19は、長さ40.8cm、頭部幅3×4cmでの鉄釘である。頭部は残存しているが、先端部は欠損している。釘2点、帶状の鉄製品1点が銹着している。

20は、先端部が欠損しているが、長さ16cmの釘である。

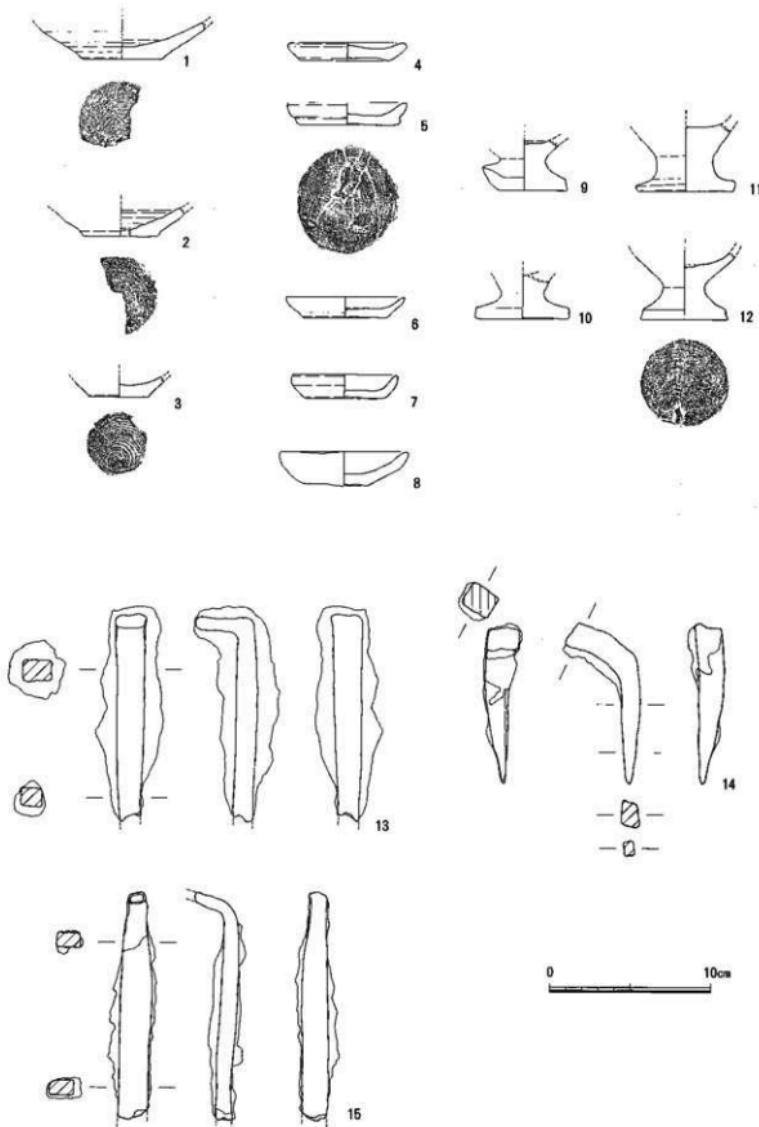
21は、頭部、先端部が欠損しているが、赤色顔料が付着している。

22は、長さ12cm以上の鉄釘である。全体的に赤色顔料の付着がみられる。

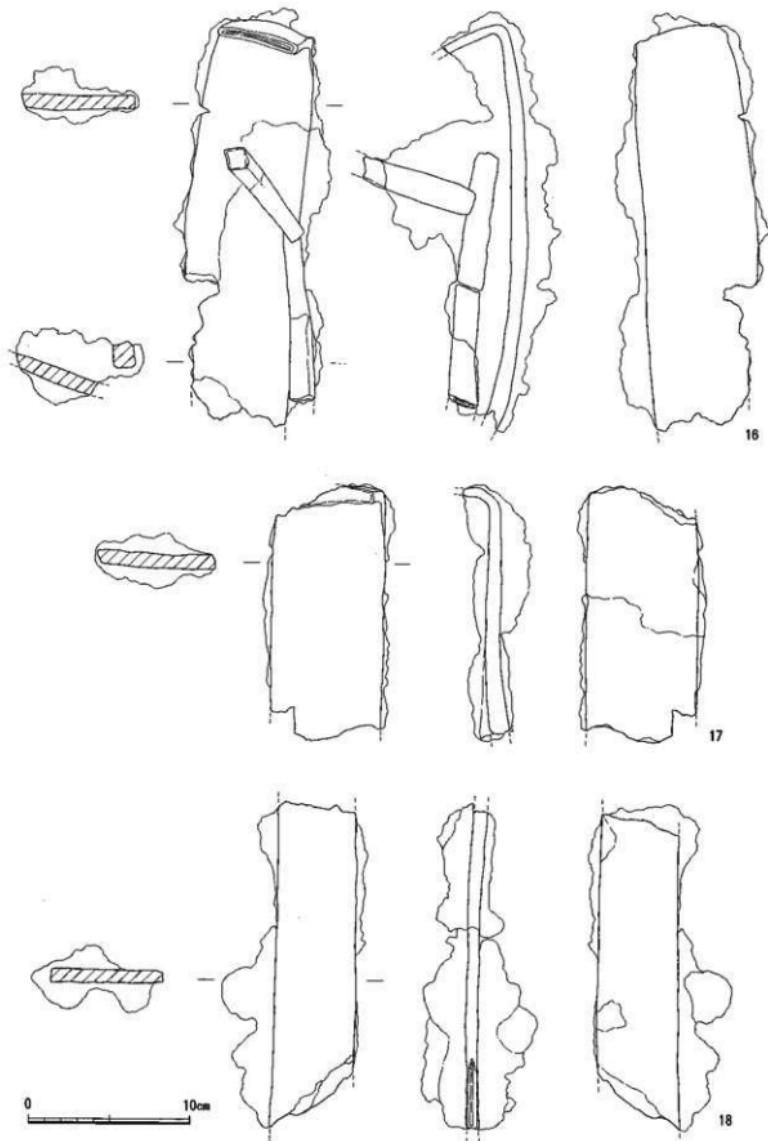
23は、長さ9.8cm以上の鉄釘である。全体的に赤色顔料の付着がみられる。

表24 八足門前調査区 南東側柱上面 出土遺物（土器）観察表（番号は第93図と対応）

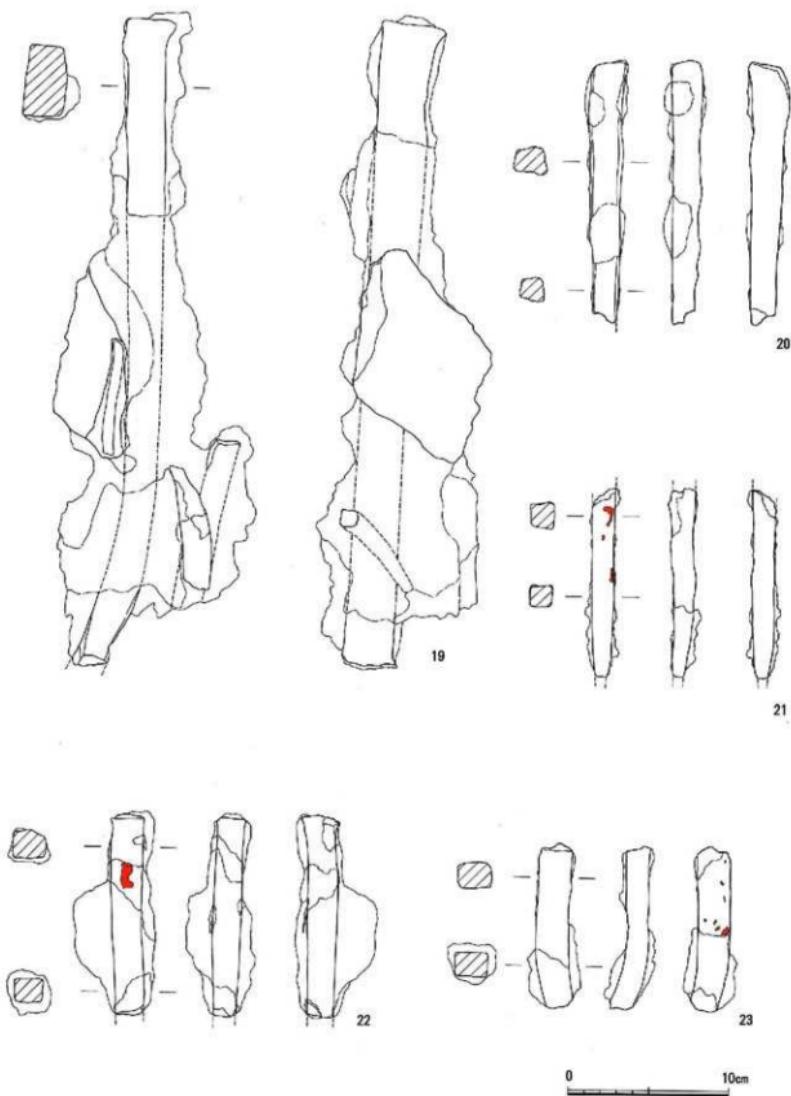
番号	場所	種類	器種	口径(cm)	底面(cm)	底径(cm)	底面平	色	脚	胎土	調査/形態/文様	備考
1	南東側柱上部	土師質土器	皿	—	—	3	全体の30	におい褐色	やや粗	底面：回転糸切り 内表面：内輪ナデ	外輪ぶつ	
2	南東側柱上面	土師質土器	皿	—	—	4.5	全体の30	浅黄褐色	やや粗	底面：回転糸切り 内表面：ヘラ抜工具による回転ナダ 外表面：回転ナダ		
3	南東側柱上面	土師質土器	皿	—	—	3.6	底面のみ	灰黃褐色	やや粗	底面：回転糸切り 内表面：内輪ナデ	摩耗が著しい	
4	南東側柱上面	土師質土器	皿	—	—	5.4	ほぼ完形	灰黃褐色	やや粗	底面：回転糸切り 内表面：内輪ナデ	—	
5	南東側柱上面	土師質土器	皿	—	—	6.2	全体の80	におい褐色	やや粗	底面：回転糸切り 内表面：内輪ナデ	—	
6	南東側柱上面	土師質土器	皿	7.3	1.4	5	全体の30	灰黃褐色	やや粗	—	摩耗が著しい	
7	南東側柱上面	土師質土器	皿	6.4	1.4	4.8	全体の80	灰黃褐色	やや粗	底面：回転糸切り 内表面：内輪ナデ	被熱による変色／内面に飛散骨質	
8	南東側柱上面	土師質土器	皿	7.8	2	4	全体の50	浅黄褐色	やや粗	底面：回転糸切り？	ゆがみが大きい／外周に飛散骨質	
9	南東側柱上面	土師質土器	帶状合付	—	—	—	全体の80	暗灰色	やや粗	底面：回転糸切り	被熱による変色	
10	南東側柱上面	土師質土器	帶状合付	—	—	5.6	全体の30	におい褐色	やや粗	—	摩耗が著しい	
11	南東側柱上面	土師質土器	帶状合付	—	—	6	全体の80	浅黄褐色	やや粗	—	摩耗が著しい	
12	南東側柱上面	土師質土器	帶状合付	—	—	5.4	全体の80	におい褐色	やや粗	底面：回転糸切り 内表面：内輪ナデ	—	



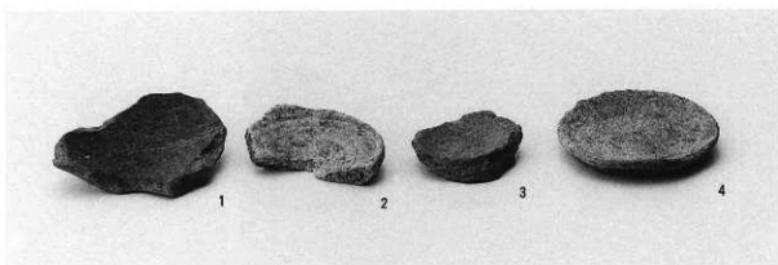
第93図 八足門前調査区 南東側柱上面出土遺物実測図(1) (S=1/3)



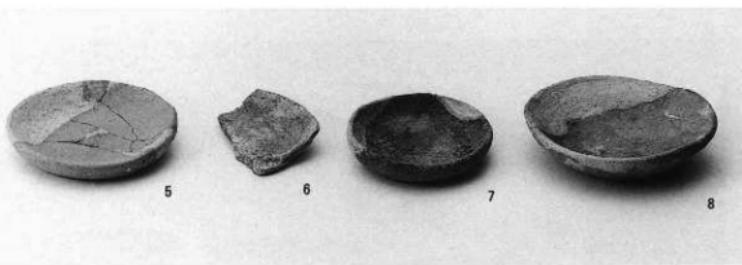
第94図 八足門前調査区 南東側柱上面出土遺物実測図(2) (S=1/3)



第95図 八足門前調査区 南東側柱上面出土遺物実測図(3) (S=1/3)



(同上)



8



(同上)

写真156 八足門前の調査区 南東側柱 土器(1) (番号は第93図と対応)



(同上)

写真157 八足門前調査区 南東側柱 土器(2) (番号は第93図と対応)



写真158 八足門前調査区 南東側柱 土器使用例

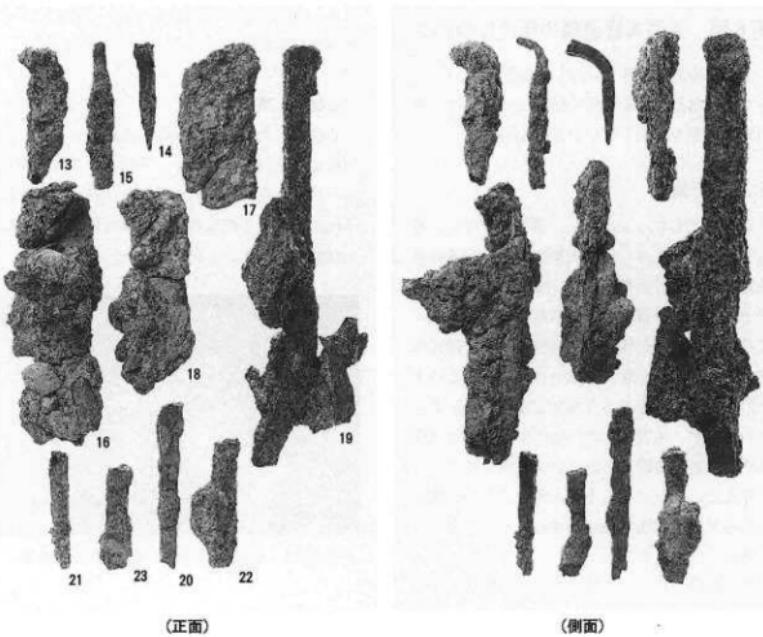


写真159 八足門前調査区 南東側柱 鉄製品（番号は第93～95図と対応）

表25 八足門前調査区 南東側柱上面 出土遺物（鉄製品）観察表（番号は第93～95図と対応）

番号	著文	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存率(%)	備考
13	南東側柱面上	釘	15.0	頭部幅 3.5×1.9	1.3×1.8	230.42	60	正面：方型／頭部：頭部平坦、折り曲げ、頭部の邊にわざかにくびれあり
14	南東側柱面上	釘もしくは栓	頭部長7.3	頭部矢	1.5×1.8	56.45	50	正面長方形／先端部から6.5cmの割断ではば90度に曲がる、頭の可能性あり
15	南東側柱面上	鍵	背部残存長12.0 爪部長1.9(複数穴)	背部幅 1.5	0.9×1.5	75.02	60	—
16	南東側柱柱上	鍵	背部残存長25.0 爪部残存4.4(複数穴)	背部幅 7.0	1.0	1485.96	80	別個体の釘が鈎状
17	南東側柱柱上	鍵	背部残存長11.5 爪部長1.8(複数穴)	背部幅 6.5	0.9	427.4	50	—
18	南東側柱柱上	鍵？	背部残存長19.5	背部幅 5.0	0.7	579.42	50	薄い板状
19	南東側柱柱上	釘	40.8	頭部幅 3.0×4.0	2.0×3.0	2.2	80	正面：長方形／頭部：頭部と同じ幅で單純に終わる
20	南東側柱柱上	釘	16.3	頭部幅 2.0×1.5	頭部幅同じ	158.6	80	正面：長方形／頭部：頭部と同じ幅で單純に終わる
21	南東側柱柱上	釘	11.8	頭部矢	1.4×1.2	56.44	80	頭部、先頭部を欠く／赤色顔料付着
22	南東側柱柱上	釘	12.5	頭部幅 2.0×1.9	頭部幅同じ	235.37	60	頭部：方型／頭部：頭部と同じ幅で單純に終わる／全面に赤色顔料付着
23	南東側柱柱上	釘	9.8	頭部幅 1.5×1.9	頭部幅同じ	81.89	50	頭部：方型／頭部：頭部と同じ幅で單純に終わる／全面に赤色顔料付着

第6節 大型本殿遺構の年代について

大型本殿遺構の年代について検討したい。

なお、自然科学的分析の結果については、第11章～13章を参照していただきたい。

1. 考古資料

遺構にともなって出土した遺物が少なく、考古学的方法により、この大型本殿遺構の時期を決定するのは、困難である。唯一時期を示す資料として、土師質土器の柱状高台付环がある。この土器は、宇豆柱上面及び柱穴内、心御柱柱穴内、南東側柱上面から出土している。この土器のみで年代決定ができるほど編年研究が進んでいないが、地理的に近い出雲市の蔵小路西遺跡や大井谷II遺跡から出土した土器と類似していること、またこれら土器と陶磁器の共伴関係からみて12世紀後半から13世紀のものと考えられる。

出土状況からこの大型本殿の存続期間、すなわち造営から廃絶に至るまでの期間は、この土器の時代幅におさまると考えられる。



写真160 八足門前調査区 柱状高台付环

2. 自然科学的分析

(1) 炭素14年代測定法による結果

宇豆柱（第12章）

宇豆柱の南柱材から採取した試料から炭素14 ウィグルマッチ法による年代測定が国立歴史民俗博物館今村峯雄氏により実施された。分析結

果は、伐採年代が西暦1215～1240（1228±13年）という結果を得た。

心御柱（第12章）

心御柱の北柱材から採取した試料から宇豆柱同様に炭素14 ウィグルマッチ法による年代測定が今村峯雄氏により実施された。結果は、伐採年代に相当する最外層年輪の年代が、西暦1197～1229+ α 年という結果を得た。



写真161 八足門前調査区 C14試料採取状況

宇豆柱直下出土の木の葉（第13章）

宇豆柱の直下から採集された木の葉は、名古屋大学の中村俊夫氏によるタンデトロン加速器年代測定システムを用いて炭素14年代測定が行なわれた。測定結果は、774±28年BPという測定結果が得られている。これを年輪年代に較正した結果を検討すると、木の葉の生育年代として西暦1242～1280年の可能性が高いとされている。



写真162 八足門前調査区 木の葉出土状況

(2) 年輪年代測定法による結果（第11章）

心御柱南西柱材直下から出土した板材を試料として年輪年代測定を行なった。板材の性格については、本章第4節で述べた。年輪数は、280年分確認され、辺材が厚さ5cm残されていることから、ほぼ表皮に近い年輪が残されていると判断できる。奈良文化財研究所光谷拓実氏による測定の結果では、残存最外年輪形成年代が、西暦1227年という結果を得ている。

3. 文献史料

詳細は、第26章井上寛司氏の「文献史料から見た宝治2年の作業大社造営」を参照していただきたい。

文献史料によれば、11世紀から13世紀にかけて複数度の本殿転倒の文献がみられる。

当該遺構に関連すると考えられる13世紀の転倒の記録は、嘉禄元年（1225）のみであり、その後転倒の記録はみられない。

その後の造営については「作業大社正殿造営日記目録」（千家家文書）『平安遺文』に寛喜元年（1229）11月2日に「仙山始木作始事」とある。これは本殿に必要な用材の伐採開始時期と考えられる。

そして19年後の宝治2年（1248）10月には、

正殿遷宮が行なわれたとされている。

また、正殿遷宮後、22年後の文永7年（1270）正月の火災で焼失したとされている。

4. 巨大本殿遺構の年代

巨大本殿遺構の年代について、土器の年代観から12世紀後半～13世紀代とされる。さらに、自然科学的年代測定法の結果としては、炭素14の年代測定法によれば、宇豆柱の伐採年が西暦1515～1240年、心御柱の伐採年が西暦1197～1229+α年という結果、また心御柱直下出土板材が、年輪年代測定法によって伐採年は西暦1227年という結果が得られた。板材は、製材時に最外表面の1～2年分が削られていることを加味すると、文献記録にみえる伐採開始時期の寛喜元年（1229）と一致する。また、炭素14の年代測定結果ともほぼ一致している。また、宇豆柱直下出土の木の葉は、炭素14の測定結果西暦1242～1280年という結果を得ている。これは、柱立てが行なわれた年代を示すものと考えられる（表26）。

以上の調査成果から、大型本殿遺構は宝治2年（1248）に正殿遷宮された本殿（宝治度本殿）であると考えられる。

表26 大型本殿の年代

調査項目／年代（西暦）	1150 1160 1170 1180 1190 1200 1210 1220 1230 1240 1250 1260 1270 1280 1290 1300
考古学的年代（土器）	（件状高台付环）12世紀後半～13世紀
文献史学的年代	【正殿式遷宮：建久元（1190年）】 【正殿式遷宮：宝治2（1248年）】 【仙山始木作始事：寛喜元（1229）年11月2日とあり】
C14年代（宇豆柱）	（1215～1240年）
C14年代（心御柱）	（1212±15年）
C14年代（宇豆柱木の葉）	（1242～1280年）
心御柱下板材の年輪年代測定	（1227年）

第7章

彰古館北の調査

第7章 彰古館北の調査

第1節 調査区の位置（第96図）

彰古館は、出雲大社境内北西部に位置し、大正3（1914）年に宝物館として建てられた建物である。この彰古館から北東に約15m、禁足地とされる八雲山裾から南に5m、現在の本殿から北約65mに調査面積95畝の調査区を設定し、調査した。調査対象地は周辺に杉が植林してある他は建物等のある場所ではなく、腐葉土が厚く堆積していた。

第2節 調査の目的

①境内北部域を対象とした範囲確認調査

これまでの調査地は境内（荒垣内）の中央に集中しており、北側については基本的な情報が

ほとんど得られていない。遺構の有無を確認し、遺跡としての広がりや、その時期的変遷の概要を把握する。

②境内地形の変遷を明らかにする。

土層の堆積状況やその時期など、基本層序の把握を目的とする。境内の景観や自然環境の変化に関する情報を得る。

③社家邸宅の構造に関する資料を得る。

調査地点には近世前期（寛文度造替時）まで北島家邸宅があったことが知られる。出雲大社の社家邸宅に関する発掘調査は前例が無く、邸宅建築の構造に関する情報を得られることが期待できる。絵図や文献記録との対比による考証研究に有効な資料が得られる可能性がある。

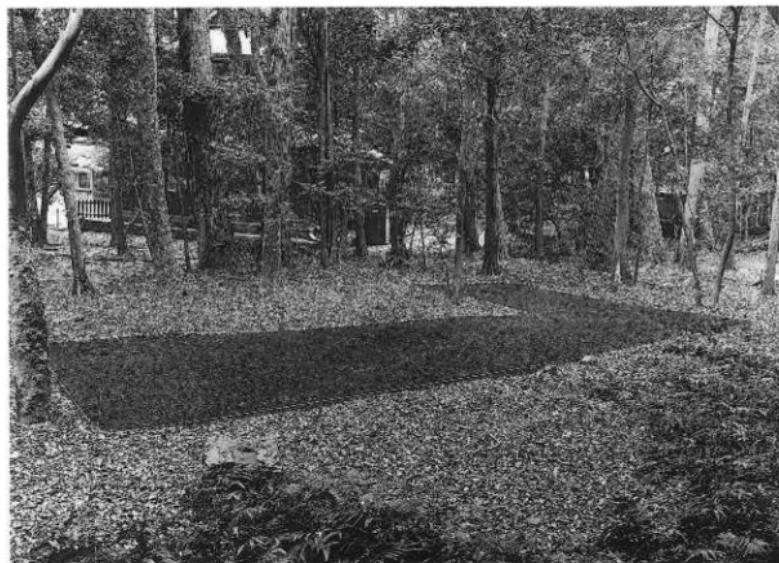
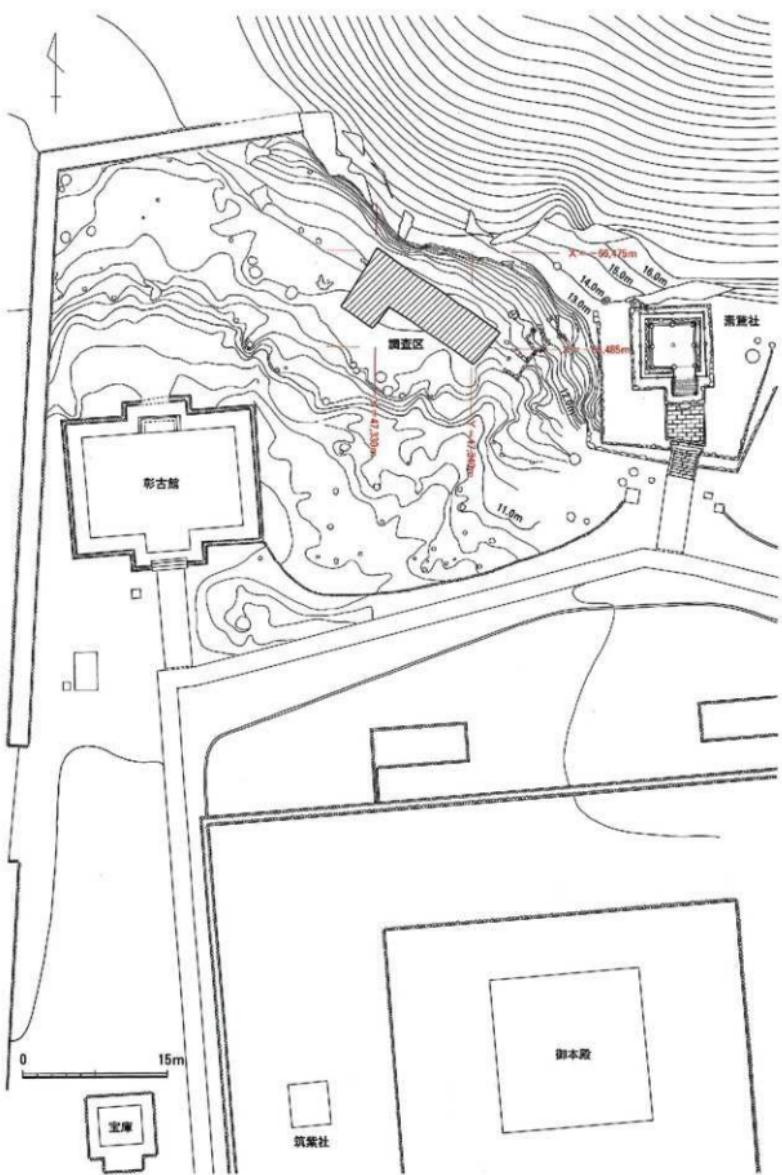
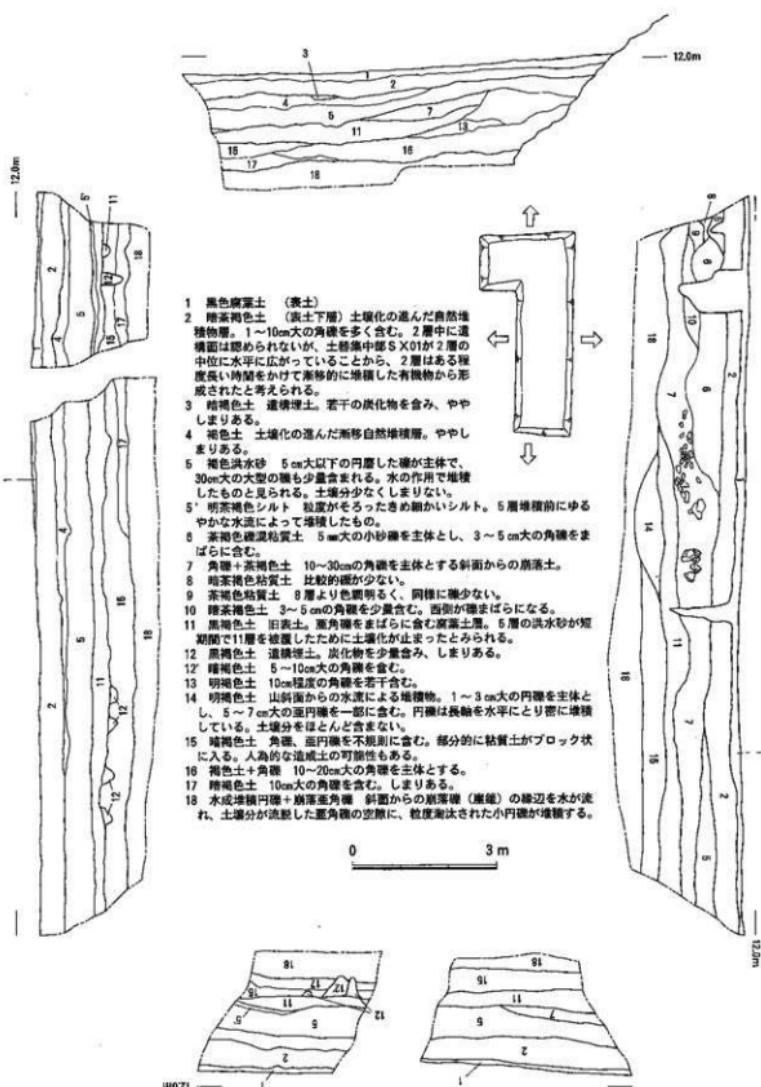


写真163 彰古館北調査区 全景（北東から）



第96図 彰古館北調査区 位置図 (S=1/500)



第97図 彩古館北調査区 土層図 (S=1/100)



写真164 彩古館北調査区 岩盤検出状況



写真165 彩古館北調査区 堆積状況（東壁・西から）

第3節 各層位について

表土～1面上層

表土層である。時期的には、現代から近世までの遺物が出土している。

出土遺物（第98～99図・写真166～174・表27～28）

1～3は、陶磁器類である。1は、瀬戸の天目碗である。2は、初期唐津の壺底部である。3は、肥前系磁器の瓶などいわゆる「袋物」である。

4～13は、土師質土器の皿である。

14～16は、土師質土器の柱状高台付の壺である。

17・18は、鉄製の釘である。

19は、銅製の煙管である。雁首部分と吸口部分は、近接して出土しており、同一個体であると考えられる。火皿径は、1.2cm。端部で木質部が確認できることから、木製の柄で接合されていたようである。

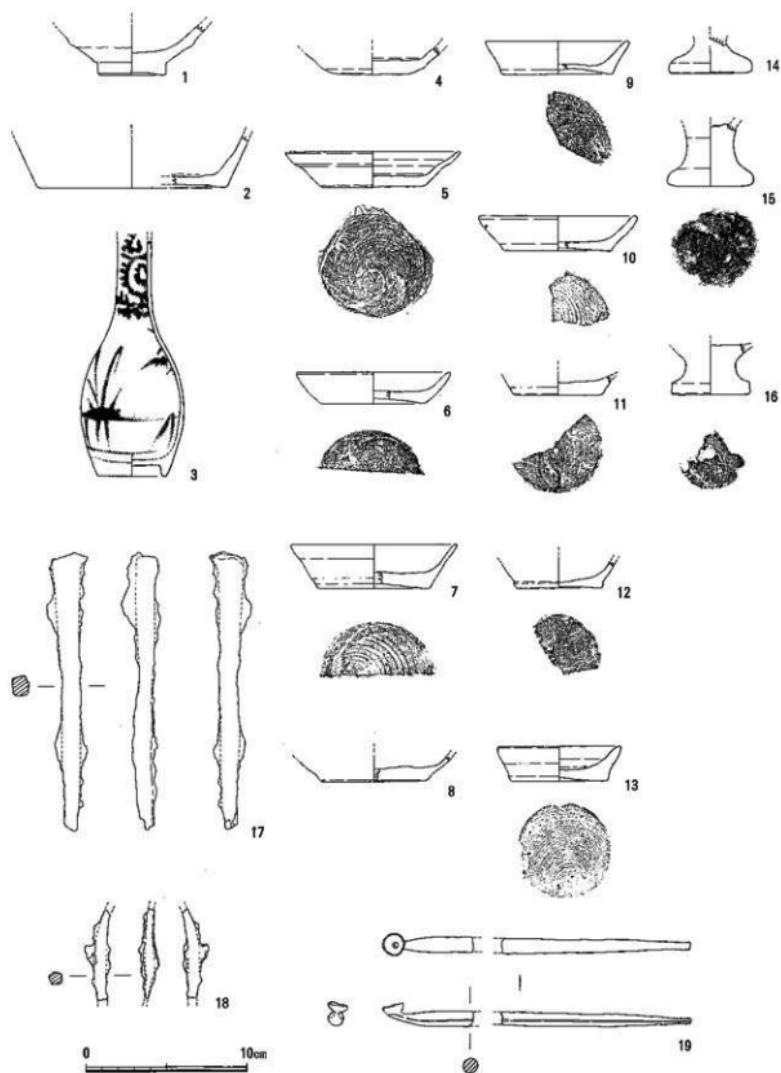
第99図の1～14は、寛永通寶である。15は末通元寶、3・5・11は、古寛永。それ以外は、新寛永である。16は、洪武通寶の模鋳錢である。

表27 彩古館北調査区 表土～1面上 出土遺物（土器）観察表（番号は第98図と対応）

番号	層位	種類	器種	口径(cm)	基高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	色調	胎・土	調査/形態/文様	備考	
											高台：ベタ足高台、貼り付け後 回転糸切り、曲取り 内面：全般施物 外面：上半施物、下半二周の ケズリに難化	瀬戸天目
1	表土～1	陶器	碗	—	—	4.3	20	胎土：黄褐色 釉薬：黒色	密	成形後全面施釉 底面：残存部分ニッコ削十月 横み痕 内面：胎に砂漠じる	—	
2	表土～1	陶器	壺	—	—	—	10	胎土：黄褐色 釉薬：朱褐色	密	口部：平行に切る鶴首瓶 底部：香司坂 外面：鶴首草文、竹葉花文、 重輪模様、ハナシズ、重輪模	肥前系陶器	
3	表土～1	磁器	瓶	—	—	4.2	80	胎土：灰白色 釉薬：町禪灰色	密	底部：回転糸切り？	—	
4	表土～1	土師質土器	皿	—	—	4.5	全体の 50	浅黄褐色	密	底部：回転糸切り？	磨耗が著しい	
5	表土～1	土師質土器	皿	10.8	2.2	6.2	全体の 30	にない橙色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	—	
6	表土～1	土師質土器	皿	9.5	2	6.2	全体の 30	浅黄褐色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	口縁部(内外) スス付着	
7	表土～1	土師質土器	皿	10.3	2.7	7	全体の 50	全体の 緑色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	口縁部(内外) スス付着	
8	表土～1	土師質土器	皿	—	—	6.3	全体の 30	灰白色	密	底部：回転糸切り 内外面：同転ナデ	指跡あり	
9	表土～1	土師質土器	皿	8.9	2	6.8	全体の 30	にない橙色	やや粗、 砂粒を多 量に含む	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	—	
10	表土～1	土師質土器	皿	9.8	2.1	6.8	全体の 30	浅黄褐色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	—	
11	表土～1	土師質土器	皿	—	—	5.4	全体の 30	にない橙色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	—	
12	表土～1	土師質土器	皿	—	—	5.2	全体の 30	にない橙色	密	底部：回転糸切り？ 内外面：回転ナデ	(内)スス付着	
13	表土～1	土師質土器	皿	7.7	2.2	6	100	にない黄褐色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	(内)全面に スス付着	
14	表土～1	土師質土器	柱状高台付壺	—	—	5	全体の 30	にない橙色	密	底部：回転糸切り？	磨耗が著しい	
15	表土～1	土師質土器	柱状高台付壺	—	—	5.2	全体の 50	黄褐色	密	底部：回転糸切り	磨耗が著しい	
16	表土～1	土師質土器	柱状高台付壺	—	—	4.8	全体の 50	にない橙色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナデ	—	

表28 彩古館北調査区 表土～1面上 出土遺物（鉄・銅製品）観察表（番号は第98図と対応）

番号	層位	種類	製品名	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存率(%)	備考
17	表土～1	鉄製品	釘	17.3	1	1.2	84.96	90	—
18	表土～1	鉄製品	釘	5.5	—	0.7	0.76	7.38	—
19	表土～1	銅製品	煙管(雁首)	5.6	—	0.9	0.9	7.46	100 雁首と吸口は同一個体
20	表土～1	銅製品	煙管(吸口)	11.7	—	0.9	14.06	100	—



第98図 彩古館北調査区 表土～1層上面出土遺物実測図 (S=1/3)



写真166 彩古館北調査区 表土～1面 肥前系磁器1(皿)



写真167 彩古館北調査区 表土～1面 肥前系磁器2(碗)



写真168 彩古館北調査区 表土～1面 肥前系磁器 3 (瓶類、その他)

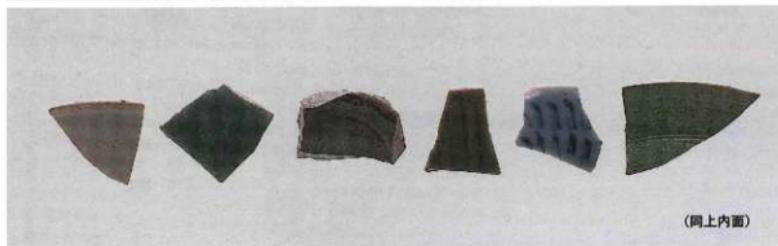
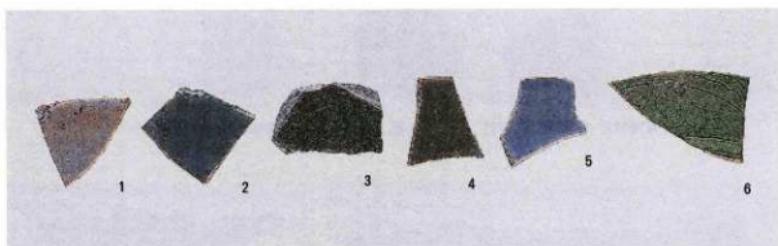


写真169 彩古館北調査区 表土～1面 肥前系陶器



1 宮器系窓 2 湾戸天目 3 備前系播鉢 4 備前系徳利

写真170 彩古館北調査区 表土～1面 国産陶器



1 白磁皿（端反、E 1群） 2 能泉窯系青磁碗（緑蓮弁文、B 1類） 3 同（B 1類又はB 2類）
4 同（緑描蓮弁文、B 4類） 5 青花皿 6 華南三彩（緑胎）

写真171 彩古館北調査区 表土～1面 貿易陶器

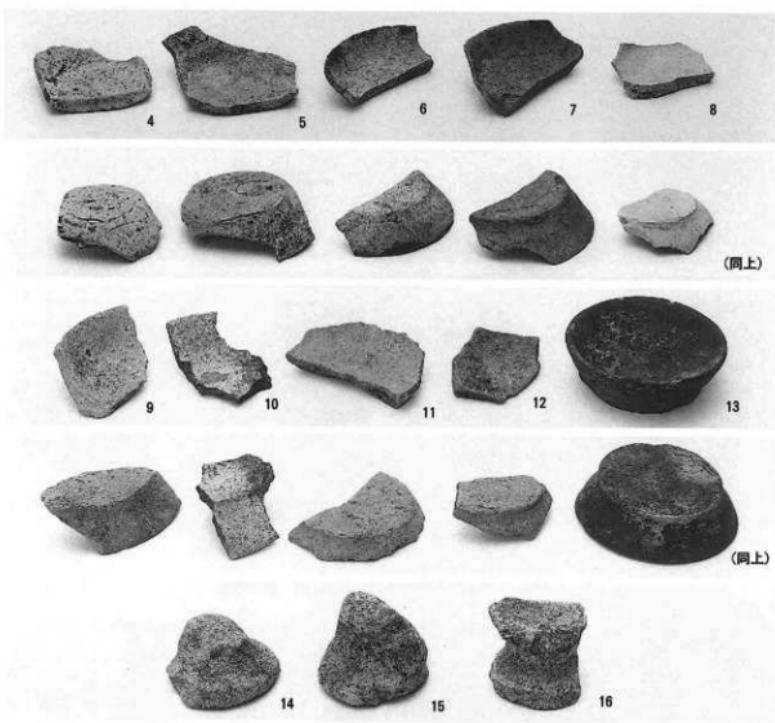


写真172 彩古館北調査区 表土～1面 土師質土器（番号は第98図と対応）

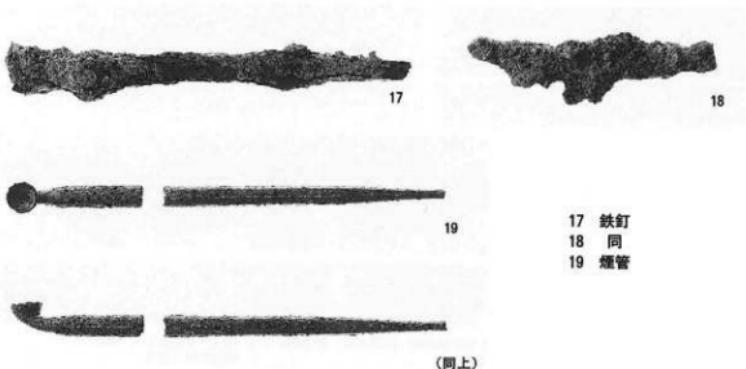
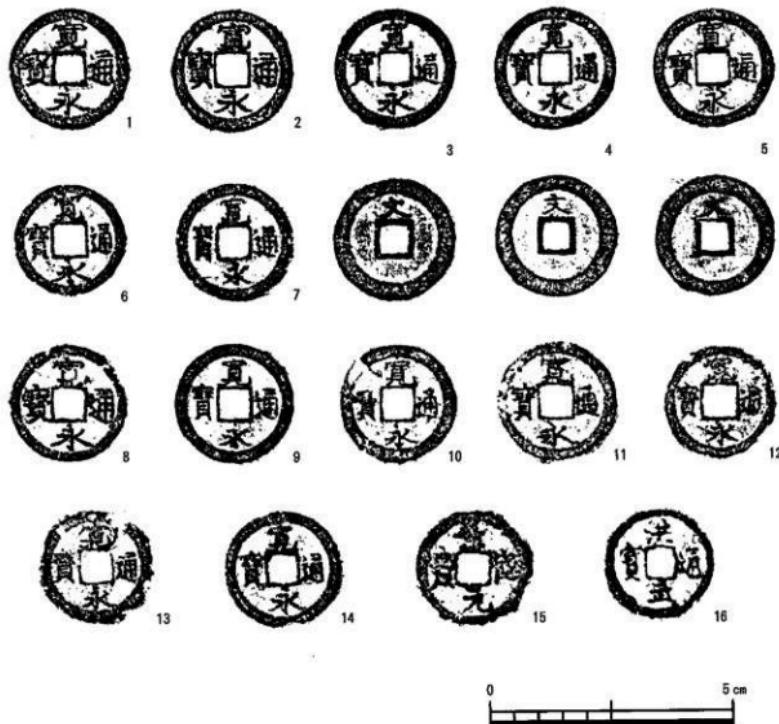


写真173 彩古館北調査区 表土～1面 鉄製品（番号は第98図と対応）



第99図 彰古館北調査区 表土～1層上面出土銭貨拓影図 (S=1/1)

表29 彰古館北調査区 表土～1面上 出土遺物（銭貨）観察表 (番号は第99図と対応)

(単位 mm)

番号	銭名	初鋤年	錢徑(A)	錢徑(B)	内徑(C)	外徑(D)	錢序	重量(g)
1	寛永通寶	古寛永(1636)	25.00	25.00	20.10	20.15	1.09～1.10	2.93
2	寛永通寶	古寛永(1636)	25.31	25.29	19.95	19.91	1.20～1.35	3.98
3	寛永通寶	新寛永(1668・文鏡)	25.24	25.31	20.25	20.24	1.30～1.35	3.32
4	寛永通寶	新寛永(1668・文鏡)	25.31	25.34	20.15	19.85	1.45～1.51	4.12
5	寛永通寶	新寛永(1668・文鏡)	25.00	25.00	19.86	19.70	1.10～1.20	2.39
6	寛永通寶	新寛永(1697)	23.25	23.25	19.15	18.34	1.10～1.15	2.71
7	寛永通寶	新寛永(1697)	24.55	24.51	19.35	19.04	1.14～1.15	2.72
8	寛永通寶	新寛永(1697)	24.30	24.09	20.01	20.05	1.05～1.10	1.81
9	寛永通寶	新寛永(1697)	24.56	24.55	19.55	19.24	1.20～1.35	3.02
10	寛永通寶	新寛永(1697)	24.21	24.31	19.21	18.65	1.09～1.11	2.73
11	寛永通寶	新寛永(1697)	24.40	24.81	19.99	19.70	1.20～1.40	2.81
12	寛永通寶	新寛永(1697)	23.11	23.05	19.05	18.74	1.09～1.15	2.08
13	寛永通寶	新寛永(1697)	22.79	22.95	18.59	18.00	0.99～1.00	1.65
14	寛永通寶	新寛永(1697)	24.16	24.50	19.22	19.81	1.18～1.20	2.66
15	景徳元寶	1004(北宋)	23.75	23.95	20.21	19.15	1.15～1.21	1.62
16	洪武通寶	編號錢(中世末～近世初頭)	22.11	22.25	19.40	18.80	1.25～1.35	2.18

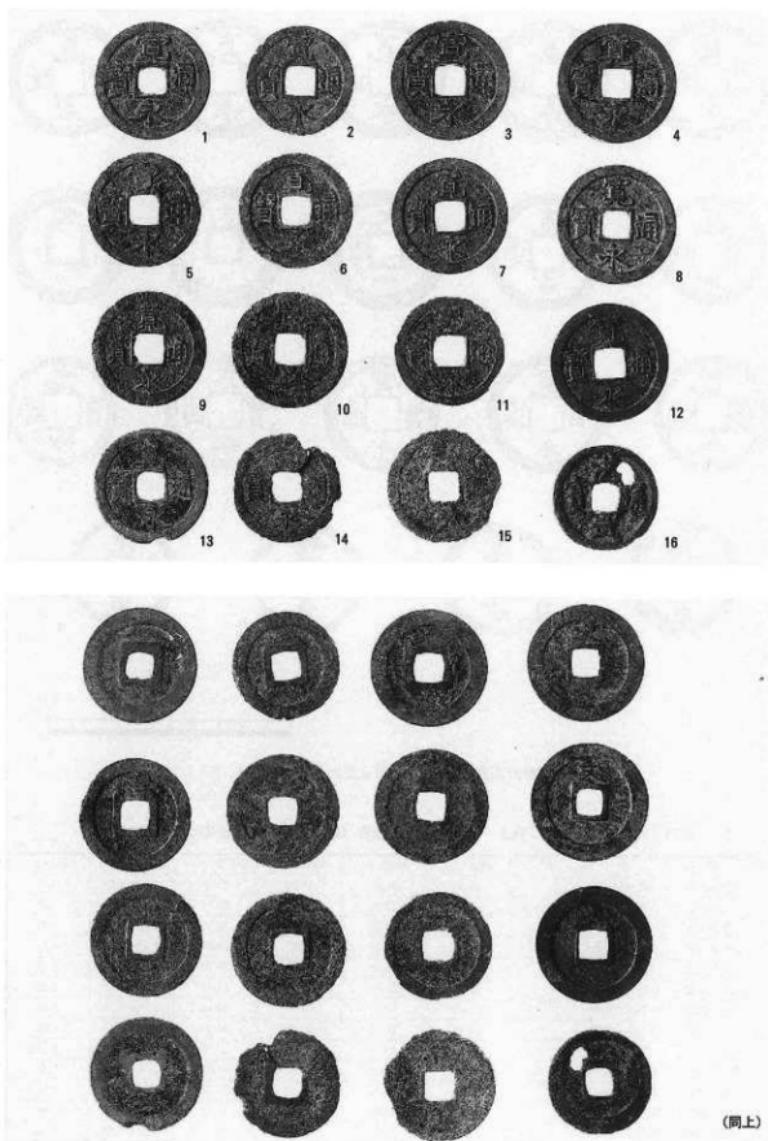


写真174 彩古館北調査区 表土～1面 錢貨（番号は第99図と対応）

1面下層

洪水層である。厚さは、20cmから30cmに堆積している。出土土器から、この層の形成年代は、17世紀中～後半と考えられる。

地質学的な見解では、この層は、一部に砂の堆積やマトリックス（隙間の土）の少ない疊の集積などから造成土ではなく、自然堆積である可能性が高い。周囲で発生した大規模な洪水の影響を受けている地層であるとの見解がある。文献史料の佐草自清「御造営日記」には、慶安元年（1648）の洪水の記事があり、この洪水に対応する層であると考えられる。

出土遺物（第100～101図・写真175～177・表30～32）

1・2は、土師質土器の皿である。

3～11は、土師質土器の柱状高台付の壺である。

12～14は陶磁器類である。12は、瓷器系壺の口縁部である。年代は、13世紀後半である。

16は、鉄製の釘である。

17は、楕円形の鉄滓である。

第101図は、寛永通寶（新寛永）である。

この他に図化しなかった陶磁器は、写真175にて掲載した。

表30 彩古館北調査区 1面下層 出土遺物（土器）観察表（番号は第100図と対応）

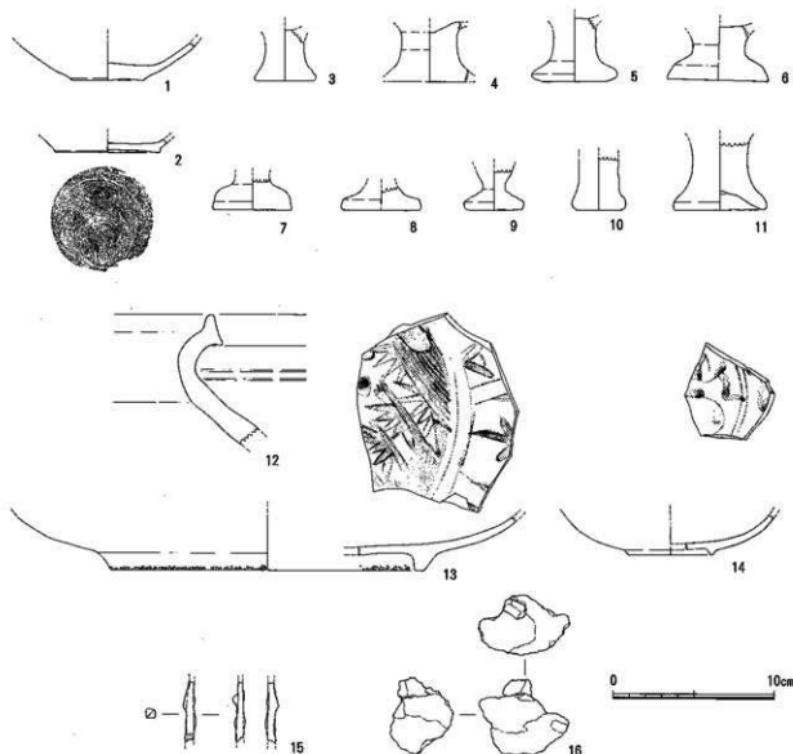
番号	層位	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	色調	胎土	調整／形態／文様	備考
1	1	土師質土器	皿	—	—	4.2	全体の50	にぼい褐色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナメ	—
2	1	土師質土器	皿	—	—	6.4	全体の50	にぼい褐色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナメ	被熱による変色（黒色、赤褐色）あり
3	1	土師質土器	柱状高台付壺	—	—	3.9	全体の30	にぼい褐色	密	—	磨耗が著しい
4	1	土師質土器	柱状高台付壺	—	—	—	全体の50	黄褐色	密	—	磨耗が著しい
5	1	土師質土器	柱状高台付壺	—	—	4	全体の30	黄褐色	密	—	磨耗が著しい
6	1	土師質土器	柱状高台付壺	—	—	6.2	全体の50	にぼい褐色	密	底部：回転糸切り？	磨耗が著しい
7	1	土師質土器	柱状高台付壺	—	—	4.9	全体の30	浅黄褐色	密	底部：回転糸切り？	—
8	1	土師質土器	柱状高台付壺	—	—	4.9	全体の30	にぼい褐色	密	底部：回転糸切り	—
9	1	土師質土器	柱状高台付壺	—	—	3.4	全体の30	にぼい褐色	密	—	磨耗が著しい
10	1	土師質土器	柱状高台付壺	—	—	3	全体の30	にぼい褐色	密	—	磨耗が著しい
11	1	土師質土器	柱状高台付壺	—	—	5.8	全体の30	にぼい褐色	密	—	磨耗が著しい
12	1	陶器	甕	—	—	—	口縁部 小片	褐色 砂粒を 多量に含む	—	口縁部：外反し、端部は横ナメ により平坦表面を持ち、上下方向 に伸びる 内外面：回転ナメ	瓷器系
13	1	磁器	皿	—	—	—	全体の10	胎土：灰白色 釉裏：緑灰色	密	高台内面：胎がけ、一部露胎 裏面：一面に砂目積み痕 内面：染付、二重模様 外面：錦目、全面施釉	津州窯系大皿
14	1	磁器	皿	—	—	—	全体の30	胎土：灰白色 釉裏：灰色	密	高台：削りだし？ 高台内面：砂目積み痕 裏面：砂目積み痕と削平 外面：回転ヘラ削り 内面：染付、二重模様	初期伊万里

表31 彩古館北調査区 1面下層 出土遺物（鉄製品・鉄滓）観察表（番号は第100図と対応）

番号	層位	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存率(%)	備考
15	1	鉄器（釘）	3.8	通頭火	0.55×0.6	2.16	50	—
16	1	鉄滓（楕円形）	—	—	—	86.06	—	色調紫紅色、楕円形（2段）か？

表32 彩古館北調査区 1面下層 出土遺物（銭貨）観察表（番号は第101図と対応）

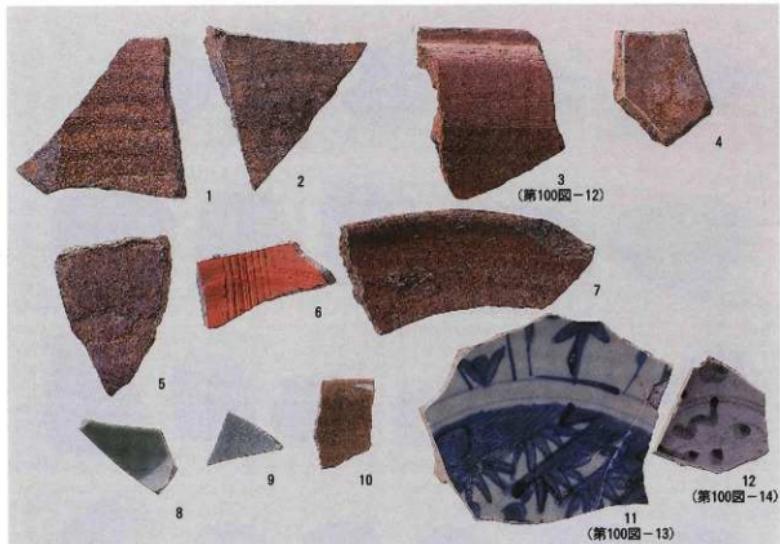
銭名	初鑄年	銭径(A)	銭径(B)	内径(C)	外径(D)	銭厚	重目(g)
寛永通寶	新寛永(1697)	22.95	23.31	18.75	19.14	1.05～1.10	2.54



第100図 彩古館北調査区 1面下層出土遺物実測図 (S=1/3)



第101図 彩古館北調査区 1面下層出土銭貨拓影図 (S=1/1)



1～3 磁器系陶器（1 捺ね跡、2・3 瓢）4 瓦質土器鉢 5～7 備前系陶器（5 斧、6・7 搾鉢）
8～10 龍泉系青磁碗（10 端反、D類）11 津州窯系磁器染付大皿 12 肥前系磁器（初期伊万里）皿

写真175 彩古館北調査区 1面下層 陶磁器

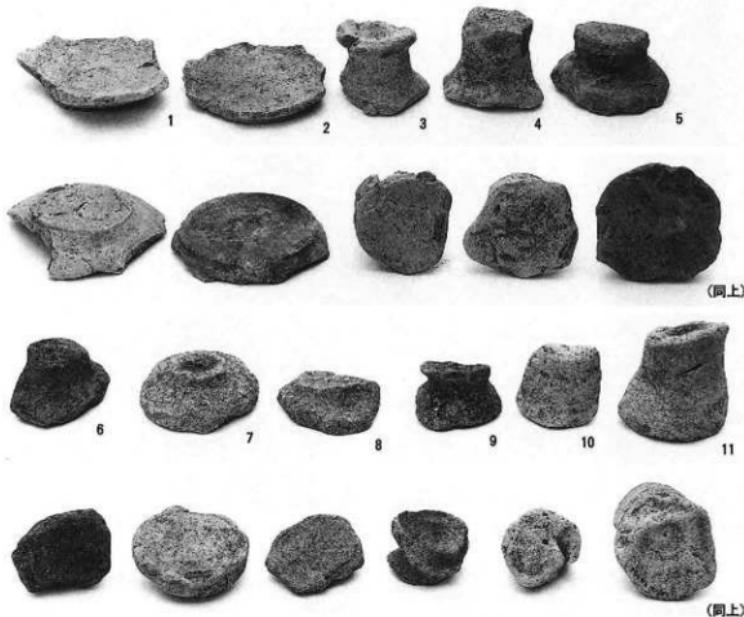


写真176 彩古館北調査区 1面下層 土師質土器（番号は第100図と対応）

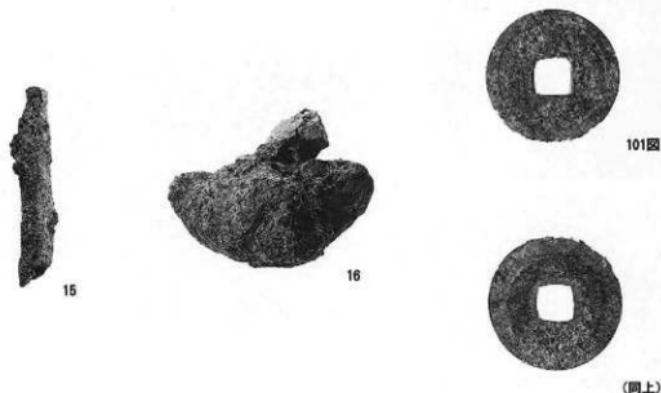


写真177 彩古館北調査区 1面下層 鉄製品・銭貨（番号は第100・101図と対応）

2面下層

2面は、しまりがあり、一定期間遺構面として機能していた可能性がある。造成土ではなく、自然堆積した面を生活面として利用していたと考えられる。しかしながら、遺構はなかった。

2面下を形成している土は、山からの崩落土である可能性がある。層の形成時期は、出土遺物から16世紀であると考えられる。

出土遺物（第102図・写真178～179・表33）

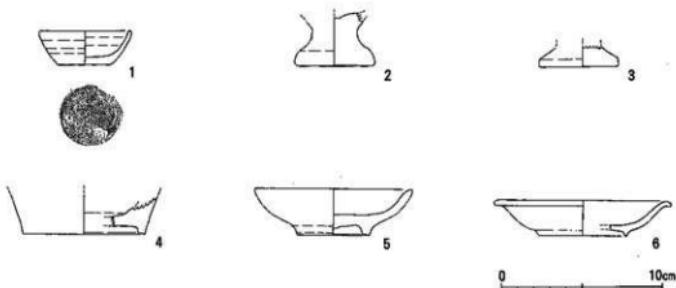
1は、土師質土器の壺である。底面回転糸切りであり、底径3cmの小型のものである。

2・3は、土師質土器の柱状高台付壺である。

4は、越州窯系の青磁碗である。平安前期のものであろう。

5は、龍泉窯青磁碗である。16世紀ごろのものであろう。

6は、白磁皿のE-1である。



第102図 彩古館北調査区 2面下層出土遺物実測図 (S=1/3)

表33 彩古館北調査区 2面下層 出土遺物（土器）観察表（番号は第102図と対応）

番号	層位	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	色調	胎上	形態・文様の特徴	備考
1	2	土師質土器	壺	5.6	2	3.2	全体の80	にぶい褐色	密	底部：回転糸切り 内外面：回転ナゲ	—
2	2	土師質土器	柱状高台付壺	—	—	5	全体の50	にぶい橙色	密	—	磨耗が著しい
3	2	土師質土器	柱状高台付壺	—	—	4.8	全体の30	にぶい橙色	密	—	磨耗が著しい
4	2	磁器 (青磁)	碗	—	—	—	底部の10	胎土：暗黄灰 釉薬：黄灰色	密	高台：基底 高台内部：釉がけ一部剥離 外面：ヘラタズリ、全面施釉、 砂目付着（砂目剥み痕々） 内面：ヘラタズリ、全面施釉	越州窯
5	2	磁器 (青磁)	碗	9.8	2.2	—	全体の45	胎土：灰色 釉薬：黄灰色 (墨灰釉)、綠 灰色	密	成形後全面施釉 高台：削りだし、内面蛇の目 輪ハギ状に露胎	龍泉窯
6	2	磁器 (白磁)	皿	10.4	2.9	4.4	全体の20	胎土：灰白色 釉薬：灰白色	密	口縁：端部折り曲げ 高台：削りだし、量付の幅が 一定でない三日月高台 高台端部が露胎するほかは全 面施釉	—



1 支器系陶器壺 2 瓦質土器壺 3 越州窯系青磁 4・5 龍泉窯系青磁 (4 壺類、5 碗)
6 白磁皿 (無反、E 1群) 7・8 青花皿 9・10 肥前系陶器皿

写真178 彩古館北調査区 2面下層 陶磁器

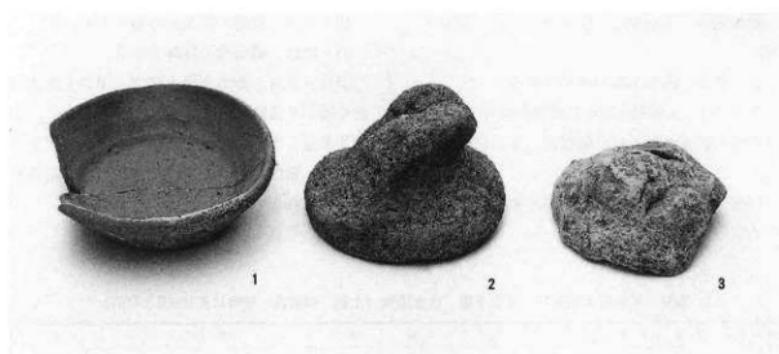


写真179 彩古館北調査区 2面下層 土師質土器（番号は第102図と対応）

3面下層

3面下を形成している土は、山からの崩落土である可能性が高い。

層の形成時期は、15世紀であると考えられる。

出土遺物（第103図・写真180～183・表34～

35）

1～2は、弥生土器の底部である。

3～12は、土師質土器の柱状高台付坏である。いずれも磨耗が激しい。底径は、5cm前後である。

13～14は、土師質土器の皿である。底径は、いずれも5cmほどである。

15は、白磁皿のD類である。時期は15世紀である。

16・17・18は、青磁の碗である。18は、青磁D類。

19・20は、青磁の龍泉窯の盤である。

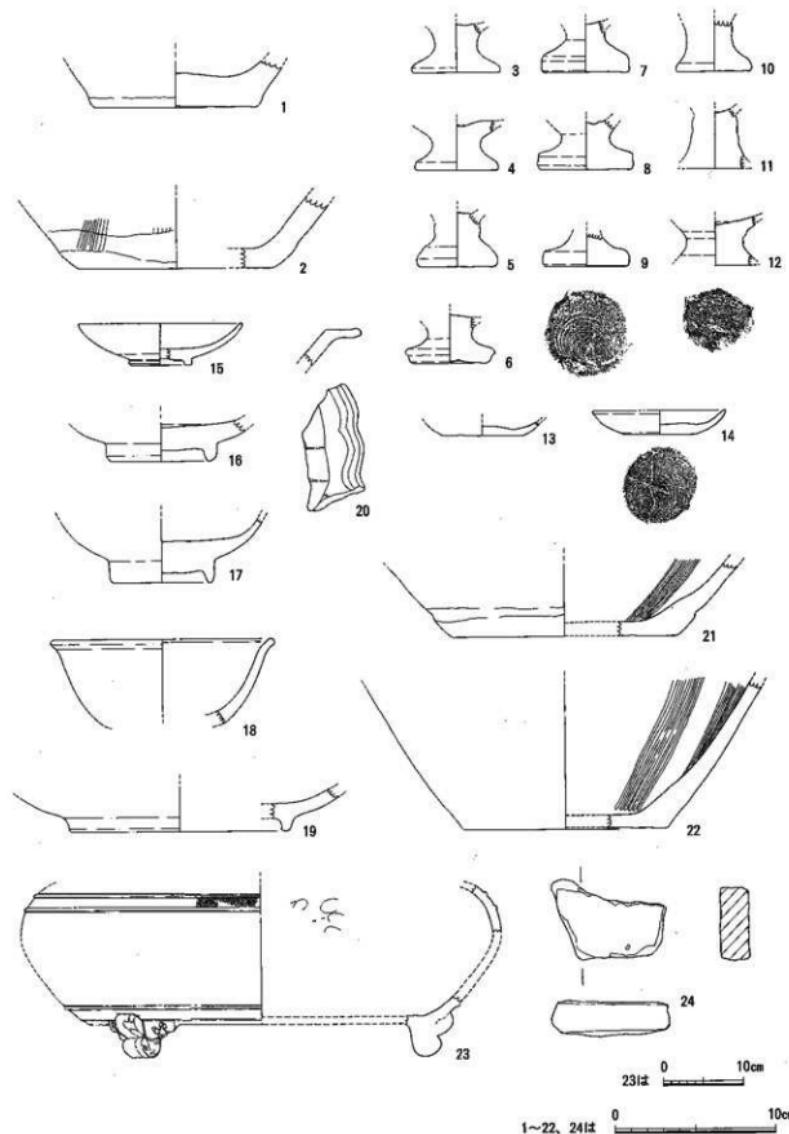
21・22は、備前焼の播鉢である。

23は、瓦質土器の奈良火鉢で、中世土器研究会の編年で浅鉢V類に分類される。外面に凸帯が2条巡らされ、その間に花文のスタンプを押捺する。製作年代は、14世紀末から15世紀初めと考えられる。

24は、平瓦の破片である。

表34 彩古館北調査区 3面下層 出土遺物（土器）観察表（番号は第103図と対応）

番号	層位	種類	断面	口径 (cm)	底高 (cm)	底径 (cm)	底面 (cm)	色 調	胎 土	高脚／形態／文様		備考
										高脚	形態	
1	3	弥生土器	底部	—	—	10	底面のみ	黄褐色	密	—	—	磨耗が著しい
2	3	弥生土器	底部	—	—	12	全体の50	淡黃褐色	密	底面：平底 内面：利爪とせず 外面：横ナメ、縦裂の跡	—	—
3	3	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	5.4	全体の50	黄褐色	密	—	—	磨耗が著しい
4	3	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	5	全体の50	におい褐色	密	底面：利爪とせず 付脚内面：中央に溝孔 外面：留松ナメ？	—	—
5	3	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	4.8	全体の50	淡黃褐色	密	—	—	磨耗が著しい
6	3	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	5	全体の50	におい褐色	密	底面：留松糸切り	—	—
7	3	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	5.2	全体の50	におい褐色	密	底面：留松糸切り	—	—
8	3	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	5.6	全体の50	におい褐色	密	内外面：留松糸	—	—
9	3	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	5	全体の50	におい褐色	密	底面：留松糸切り	—	—
10	3	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	4.5	全体の50	黄褐色	密	底面：留松糸切り	—	磨耗が著しい
11	3	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	—	全体の30	黄褐色	密	—	—	磨耗が著しい
12	3	土師質土器	柱状高台付坏	—	—	—	全体の30	淡黃褐色	密	底面：留松糸切り	—	—
13	3	土師質土器	皿	—	—	5	全体の30	淡黃褐色	密	—	—	磨耗が著しい
14	3	土師質土器	皿	8.2	1.5	4.2	今体の80	淡黃褐色	密	底面：留松糸切り 内外面：留松ナメ	—	—
15	3	磁器（白磁）	皿	10.3	—	—	全体の10	胎土：灰白色 釉素：乳白色	密	高台：内側に留松糸 外側：上部を削除、下でケズリ一端で遮断	—	15世紀D期
16	3	磁器（青磁）	皿	—	—	5	底面の50	胎土：灰 釉素：暗緑色	密	高台：削り取れ、ケズリ 高台内面：留松 内面：蛇の目模様	—	—
17	3	磁器（青磁）	皿	—	—	6	全体の30	胎土：灰白色 釉素：暗緑色	密	高台：削りだし 高台内面：露胎 内外面：留松ヘラケズリ、成形後施釉	—	—
18	3	磁器（青磁）	皿	14	—	—	底盤小片	胎土：灰白色 釉素：暗緑色	密、砂粒を多く含む	口盤部：外反、玉縁状	—	—
19	3	磁器（青磁）	皿	—	—	—	口盤基小片	胎土：灰白色 釉素：暗緑色	密	裏付：高台内部施釉	—	—
20	3	磁器（青磁）	皿	—	—	—	口盤部小片	胎土：灰白色 釉素：暗緑色	密	口盤等：大きくなりて水平に伸びる折れ縫、縫を繋ぐ突起があり、それと平行して「森へつ」の沈刻文 内面：山形の凹凸に形成される	—	—
21	3	陶器	擂鉢	—	—	—	全体の10	胎土：褐色 釉素：暗緑灰色	やや粗、2mm 大の砂粒を少し含む	粘土混入上げ 底面：平坦、ナメ 内外面：半位10mmの側面のち推動、側面1単位ごとの間隔が 大きい 外側：留松ナメ	—	偏明燒
22	3	陶器	擂鉢	—	—	—	全体の10	暗赤褐色	やや粗	—	—	—
23	3	陶器	奈良火鉢	—	—	—	全体の10	灰色	密	底面：留松かけ付け、底部へ向けて整形 内外面：ナメ 外側：一気に貼付文様、菊花文、高輪付文様	—	—



第103図 彩古館北調査区 3面下層出土遺物変測図 (23:S=1/6、それ以外S=1/3)

表35 彩古館北調査区 3面下層 出土遺物（瓦）観察表（番号は第103図と対応）

番号	層位	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	胎土	色調	備考
24	3	瓦(平瓦)	6.8	4.2	1.8	密	暗灰色	—



写真180 彩古館北調査区 3面下層 弥生土器 (番号は第103図と対応)

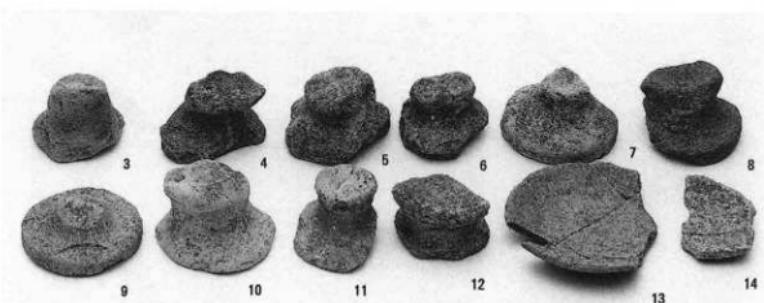


写真181 彩古館北調査区 3面下層 土師質土器 (番号は第103図と対応)

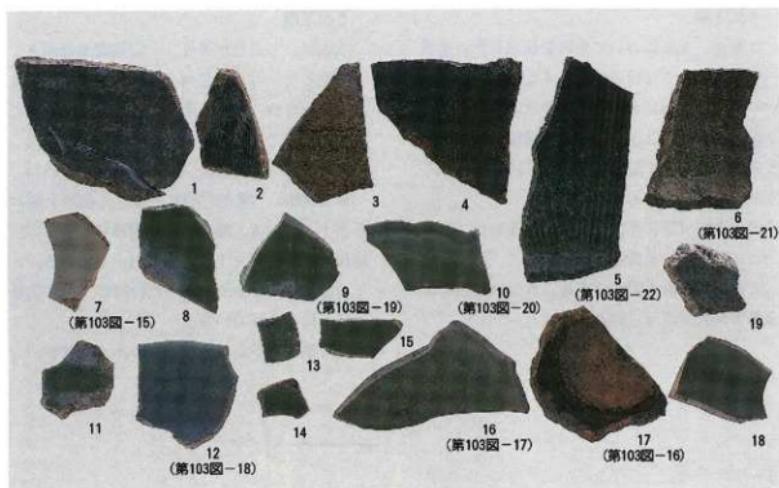


写真182 彩古館北調査区 3面下層 陶磁器

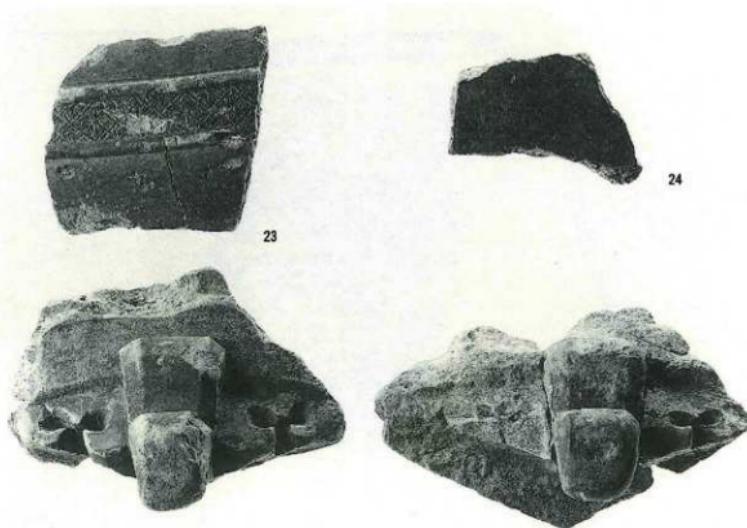


写真183 彩古館北調査区 3面下層 瓦・瓦質土器 (番号は第103図と対応)

4面下層

4面は、上面において土坑を検出した。土坑の性格については後述する。4面下を形成している土は、崖縁による堆積物が水の作用によって洗われていることから、自然堆積の層であると考えられる。3面下層とほぼ同時期15世紀ごろに形成されたと考えられる。

出土遺物（第104図・写真184・表36）

1は、龍泉窯系青磁の碗である。

2は、須恵器の器台である。外面に貝殻による刺突列点文がみられる。

5面下層

5面は、しまりがあり、一定期間遺構面として機能していた可能性がある。しかし、遺構は検出されなかった。5面下は、洪水による土石流が堆積していた。

出土遺物（第105図・写真185～187・表37）

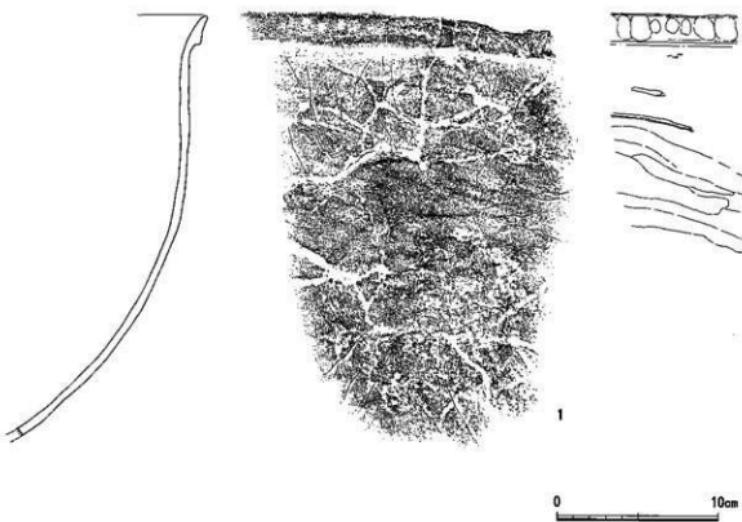
第105図は、縄文土器である。5面の上面から出土している。縄文時代晚期最終末から弥生時代初頭の突帯文土器が1点出土している。

口縁端部からやや下がった位置の外側に突帯が貼り付けられている。

その他5面下からは、土器の出土はない。



第104図 彩古館北調査区 4面下層出土遺物実測図 (S=1/3)



第105図 彩古館北調査区 5面下層出土遺物実測図 (S=1/3)

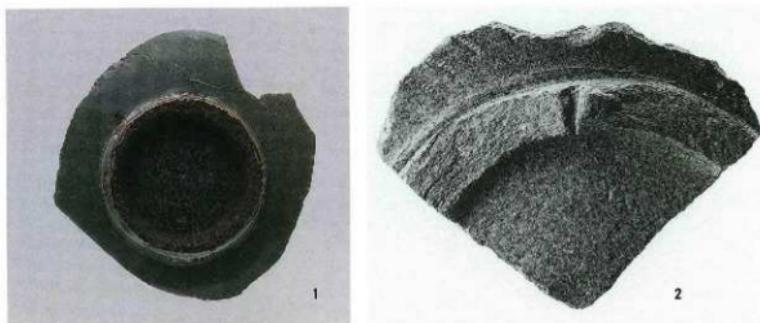


写真184 彩古館北調査区 4面下層 土器（番号は第104図と対応）

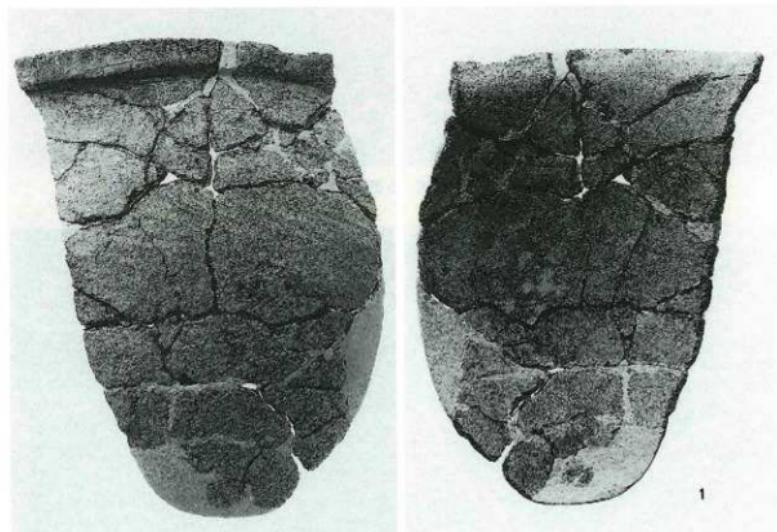


写真185 彩古館北調査区 5面下層 織文土器（番号は第105図と対応）

表36 彩古館北調査区 4面下層 出土遺物（土器）観察表（番号は第204図と対応）

番号	層位	種類	器種	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	保存率 (%)	色 調	胎 土	形態・文様の特徴	備 考
1	4	壺器	壺	—	—	5.6	40	濃緑色	密	—	龍泉窯青磁
2	4	須恵器	壺台	—	—	—	小片	暗青灰色	密	高台：貼付け、透かし 环带内面：回転ナデ、自然輪 外面：回転ナデ、貝殻による 刺突列点文	—



写真186 彩古館北調査区 5面下層の状況（北西から）



写真187 彩古館北調査区 5面下層縄文土器出土状況

表37 彩古館北調査区 5面下層 出土遺物（縄文土器）観察表（番号は第105図と対応）

番号	柄 位	種 類	器 様	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	色 調	胎 土	調整/形態/文様	備 考
1	5	縄文土器	甕	—	—	—	口径の 2/3	暗黒褐色 褐色 黄褐色	赤 粘土を大量 に含む	口縁部：端部外側に軽十絆貼 付けのち指オサエ、横ナデ。 内面から指オサエ、ヘラミガ キ？ 内面：調整判然とせず 外側：横ナデ、刹位のヘラミ ガキ？	—

陶磁器について

陶磁器は、表土から4面下層まで出土している。なかでももっとも出土量が多いのは、表土層の肥前系陶器・磁器（写真166～169）であり、彩古館北調査区陶磁器出土量全体の68パーセントに達する。しかしながら1面下層からは、出土量が4点と極端に減少する。

表土層では、国産陶器として瓷器系陶器甕、瀬戸天日、備前系陶器（すり鉢・利徳）が出上っている。（写真170）貿易陶磁器としては、端反りの白磁（E-1）、龍泉窯青磁碗の鎬蓮弁文（B1類）、線描蓮弁文（B4類）、花青皿、華南三彩（綠釉）が出土している。（写真171）

1面下層では、国産陶磁器として、瓷器系陶器（捏ね鉢・甕）、瓦質土器（甕）、備前系（甕・擂鉢）、肥前系陶器・磁器が出土している。ま

た、貿易陶磁器としては、漳州窯系磁器染付け（大皿）・龍泉窯系青磁碗が出土している。（写真175）

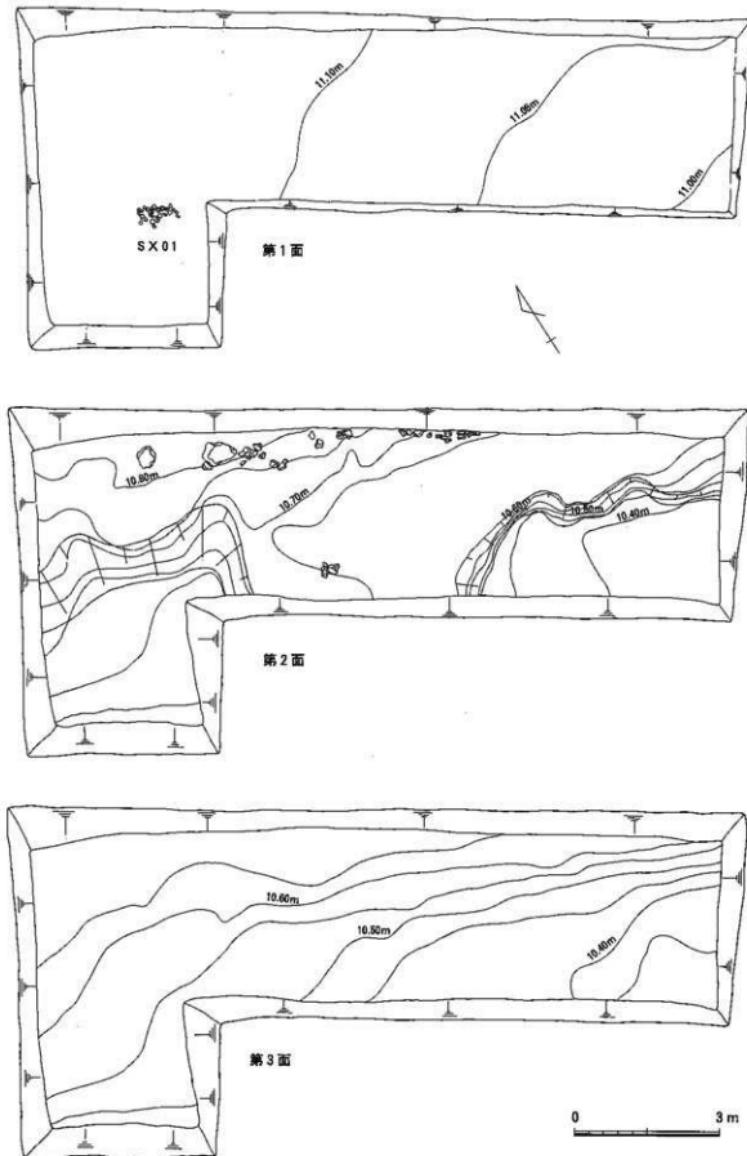
2面下層では、国産陶磁器として肥前系陶器、瓷器系陶器（甕）・瓦質土器（甕）が出土している。また貿易陶磁器は、越州窯系青磁碗、龍泉窯青磁（甕類・碗）、端反りの白磁（E-1）、青花が出土している。（写真178）

3面下層では、国産陶器として中世須恵器、瓷器系陶器（捏ね鉢）・瓦質土器（甕）が出土しており、また貿易陶磁器は、白磁皿（D類）、龍泉窯系青磁（盤・碗）が出土している。（写真182）

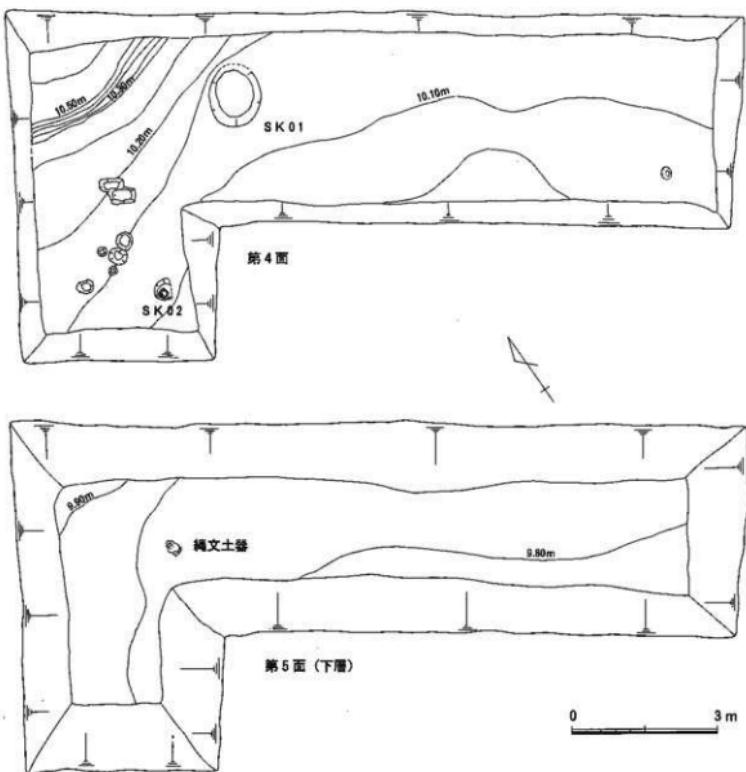
4面下層では、遺物全体の出土量が2点と極端にすくないが、龍泉窯系青磁碗1点が出土している。（写真184）

表38 彩古館北調査区 土師質土器・陶磁器集計表

種 別	白 磁		青 磁		龍泉窯系		越州窯系		
	白	磁	D類	E-1	B-1	B-2	B-4	D類	
表土～1面上	50	3			1	2	1		
1面下層	9	10						1 2	
2面下層	2	3		1				3 1	
3面下層	23	18	1			1	1	9	
4面下層								1	
種 別	青 花			河 南 線 繩		漳 州 窯 系 磁 器		肥 前 系 甕 器	
	C群	その他	甕	皿	皿	碗	その他の袋物	猪口	その他
表土～1面上	1		1		21	19	16	3	28
1面下層				1	1				
2面下層		2				2			
3面下層									
4面下層									
種 別	肥 前 系 陶 器		瀬 戸		備 前		窯 瓶 系 陶 器		瓦 質 中世須 恵 器
	天目碗	擂 鉢	甕	甕	利 徳	甕	捏ね鉢	甕	
表土～1面上	24	1	1			1	1		
1面下層	1		2	1		1	1	1	
2面下層						1		1	
3面下層			3				1	1	1
4面下層									



第106図 彩古館北調査区 遺構面平面図(1) (S=1/100)



第107図 彩古館北調査区 造構面平面図(2) (S=1/100)



写真188 彩古館北調査区 1面検出状況（北西から）

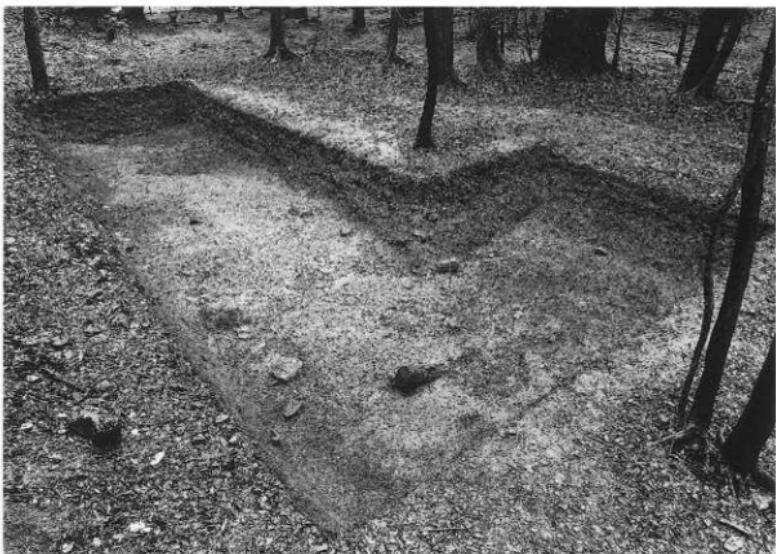


写真189 彩古館北調査区 2面検出状況（北西から）



写真190 彩古館北調査区 3面検出状況（北西から）



写真191 彩古館北調査区 4面検出状況（東から）